

鏡
の
權
三
重
帷
子

解題

享保二年八月二十二日から、初めて大阪の竹本座に上演された。作者は近松門左衛門(時に六十五歳)である。本曲は二卷に分れてゐる。近松が姦通を取扱つた有名な物に「堀川波鼓」「大經師昔曆」「鐘の權三重帷子」の三曲がある。本曲は其の中で最も勝れた作である。

實説

「月堂見聞集」卷之九、享保二年の條に、
「七月十七日夜五つ時分、大坂高麗橋にて妻敵打在之、双方共に雲州松平出羽守殿御家中

妻敵	近習中小姓	池田	文次	年廿四歳
女	正井宗味妻	とよ	とよ	年卅六歳
實夫	茶役	正井	宗味	年四十八歳
	とよ親	小林	幸左衛門	
	幸左衛門子	同	彌市郎	年卅四歳
	宗味子三人	姉	くめ	年十三歳
		弟	鐵太郎	年十一歳
		妹	よそ	年八歳

右は文次・とよ兩人、六月八日に國元を欠落仕候て、同二十三日に大坂へ著、宗味は六月二十七日に江戸發足、七月十三日に大坂御奉行所へ相斷、同十七日討之、小林彌市郎義兩人之非道を怒り、宗味をすゝめて大坂へ同道仕、文次旅宿を尋出し、兩人をそびき欺き、方人顔して宗味等ねらふ由を申、今夜の中に大坂をひらき、京都へもかくれ可申かと諫む、兩人實と心得、

高麗橋迄出る處を宗味待かけ討之、文次が衣類は越後ちよみの帷子・染紋有、紫縮緬の帶、疵は大小十二ヶ所、とよ衣類は絹ちよみ帷子・墨繪萩の模様、上帶黒縮子、下帶白縮緬、疵一ヶ所けさ切り、宗味は足に一ヶ所疵有、是は文次が止めを刺し候時に下よりなぐり候疵之由、彌市義は兼て助太刀不叶故に、兩人相果候を見て、直に國元へ歸り候、鐵太郎は朋輩の玉井銀次預り置、姉妹は祖父小林幸左衛門預り

大坂御檢使、小川甚左衛門殿、寺西市郎左衛門殿、宗味大坂旅宿天満老松町升屋伊右衛門、文次大坂旅宿本町糸屋町紀國や惣次郎とある。

本曲との關係は次の通り

伏見	京橋	大阪高麗橋			
笹野權三 <small>(廿五歲)</small>	池田文次 <small>(廿四歲)</small>	さ	る <small>(卅七歲)</small>	と	よ <small>(卅六歲)</small>
淺香市之進 <small>(四十歲)</small>	正井宗味 <small>(四十歲)</small>	岩木忠太兵衛 <small>(六十歲)</small>	小林幸左衛門		
岩木甚平	小林彌市郎 <small>(卅四歲)</small>	菊 <small>(十三歲)</small>	く	め <small>(十三歲)</small>	
虎次郎 <small>(十歲)</small>	鐵太郎 <small>(十一歲)</small>	捨 <small>(九歲)</small>	よ	そ <small>(八歲)</small>	

影響

この女敵討は、繁華な大阪高麗橋上の出來事であつた爲に大評判となり、劇にも仕組まれ小説にも作られた。

「女敵高麗茶碗」の序文に、

「難波の芝居に八つの櫓先を争ひ、盆替りの間もなく、場所の働き目を驚かし、けにや好色桶辨慶とは近松門左が思ひつき、浮世は夢の浮橋と吾妻三三八が趣向の外題なり、これぞ因果は廻り燈籠の、嵐になびき吹き傳へたる女敵討、名高き橋の咄を其

のまま、取りつくろはず立て掛けて、高麗茶碗とこの書をいふのみ、時に享保二つの年七月二十一日」とある。「好色橋辨慶」は竹本座で演じようとした物であり、「浮世は夢の浮橋」は、吾妻三八が座元であつた大阪新地櫻橋北の芝居で演じた物であらうが、どちらも其の内容は詳でない。

淨瑠璃では、本曲を改作した物に、「笹野権三は色とり密夫し、裾重紅梅服」(淺田一鳥。但見彌四郎作)があり、また本曲を翻案した物に、「お咲つゝおちしあめかほは」(達田辨二・吉田鬼眼作、安)がある。文治棲重血紅殿(永九年一月江戸肥前座上演)がある。

歌舞伎では、近頃になつて「鑓の權三重帷子」(明治四十二年七月、別誂重帷子)大正三年七月(帝國劇場上演)などが上演された。浮世草子では、「女敵高麗茶碗」(享保二)、「雲州松江の鱧」(享保二)、「亂脛三本鑓」(西澤與志作)がある。

上 卷 (濱の宮馬場。淺香市。之進留守宅。數寄屋)

登場人物の主な者

- 笹野権三 (雲州松江城主の表小) お
- 雪 (川側伴之丞の妹。十八歳) お雪の乳母(六十歳)
- 川側伴之丞 (雲州松江の侍。権三の朋輩) お
- 岩木忠太兵衛 (進物番の侍。おさの父。六十八歳) お
- 角介 (おさる内の僕) お
- 菊 (おさるの長女。十三歳) 虎次郎 (お菊の弟。十歳)
- 捨虎次郎の妹。九歳) お
- 杉 (おさる内の下女) 萬
- 介 (伴之丞の僕) 岩木甚平 (おさるの弟)

梗概

雲州松江城主の表小姓笹野權三は、温雅で多藝多才な美男子であつたから、「鏡の權三は伊達者でござる、油壺から出す様な男、しんとんとろりと見惚れる男、どうでも權三は好い男」と、歌にまで唄はれて讚美された。或日、彼は濱の官鳥居通りの馬場に出で、馬術の稽古を勵んでゐると、愛人のお雪が乳母を伴つて通りかかつた。そして乳母は權三の足の爪先・鍔共にしつかと取り、「私が貴方とお雪様との御縁を取持つたに、其の祝言は何日なさる」と迫る。權三「申すはいかがなれども、お雪殿の兄伴之丞は一風あるお人ぢや。それに自分から其方の妹を妻に貰ひたいとは、恥かしくて言ひかねる。誰か媒人を頼んで、其の者の口から話を進めれば、自分は得心だし、伴之丞さへ承知なら、用人衆に申し出てお許しを得れば濟む事ぢや」といふ。お雪は喜んで帶を差出し、「これを見て下さい。丸に三つ引はお前の御紋、私は真菊、良うはなけれど私が細工。末永う縁起を祝つて之をお召しなされませ」とて、鞍の前輪に打掛ける。權三は「忝い」と戴いて、其の帶を疊み懐に押入れる。

この時お雪は伴之丞が馬に乗つて来るを見て、乳母と共に姿を隠す。伴之丞は權三に聲を掛け、「競馬をしよう」と言ひ出し、權三の嫌ふを強ひて權三と共に驅飛ばし、落馬して腰背を打當て、痛みを押へながら雑言を放つて當り散らす。

折節若木忠太兵衛が通り合はせ、「やあ御兩人、この度東の御家老から御状があつた。若殿の御祝言の悦びの振舞に、近日の中お國で眞の臺子の茶の湯の儀が催される。就いては我らが掣淺香市之進が江戸詰の留守中であるから、其の弟子の中で眞の臺子の傳授を受けてゐる者に勤めさせようとの事。御兩人の中でお勤めになれば其の身の光榮でござる」と語る。伴之丞「はあ、眞の臺子易い事。御用は拙者が承る。心安う思し召せ」とて、甚だ横柄である。權三「私風情の者が秘傳の許受けよう筈もござらねども、かねて師匠から少々聞きかじつてゐますから、他から非難されぬ程のことは致しませう」とて謙遜する。忠太兵衛は伴之丞を面憎く思ひ、耳こすりを言つて別れる。

淺香市之進の妻おさるは、華奢骨細の美女である。心も風雅に興味も深く、夫の留守中家事を取締り、庭園の風致も家の掃除も行届いてゐる。下男角介が中息子の虎次郎と巫山戯るを叱り、長女お菊の髪を結び、其の結び振の好きを下女お杉に語つて喜

び、「器量も諸藝も勝れた笹野權三に連添はせてやりたい」と一人ごつ。其の心の中には、孤園の淋しさを感じる折々、美しい權三の姿を思ひ浮べ、せめては我が輩として見たいと云ふ執着があつた。然しそれが我が身を焼く戀であらうとは、自分にもしかと自覺しなかつたのである。

笹野權三は進物の酒樽を僕に持たせて、師匠の留守宅を訪ひ、おさるに會つて眞の臺子の傳授を懇望する。おさるは快く承知し、その代りとして己が娘お菊との婚姻を約させる。折からお雪の乳母が訪れ、下女の萬が取次に出る。「私は伴之丞の妹お雪と申す者の乳母でございます」といふ乳母の聲に、權三ははつと驚く。おさるはかねて伴之丞が己れに横戀慕せるを憎んでゐるので、權三に其の由を語り、「あの婆に見られぬやうに歸つて、また晩にお出でなさい」と、約して歸す。乳母「お雪様と權三様とは既に納得なれば、此方の奥様に祝言の媒人を頼みに参りましたと、傳へて下され」と喋り立てて去る。おさるは陰に隠れて之を聞き、さては權三に愛人があるかと妬ましく思ふ。折から忠太兵衛が来て、孫の虎次郎・お捨と戯れ、庭園をほめ、おさるに權三の事を語り、「茶道の祕傳を隱密に教へさつしやれ」と、話し合つて歸る。おさるは父を見送つて門の戸を鎖す。

初夏の日は既に暮れかかり、おさるは石燈籠に火を點す。數寄を凝らした庭の面は、打水に濡れて風涼しく、若葉の木立物ふりて、路次ほの暗き中に、光るは縁笹におく露か螢か。夜の更けるにつれて、喧しく鳴く蛙、しよろく流れる水の音も、手に取るばかりに聞える。おさるは縁端に一人つくねんとして、心も濕る袖の露、權三の來るを待侘びながら、彼に愛人のあるを思つて嫉妬に胸を焦す。かかる折から權三は人目を忍んで訪れる。おさるは直に手燭を挑び、傳授箱を携へて權三を數寄屋に誘ひ、祕傳の繪圖巻物を披見させる。

かねておさるに横戀慕せる伴之丞は、今夜こそおさるを口説き落して、傳授をも得ようと決心し、下男の波介を伴ひ、四斗樽の鏡も底も抜いて枳殻垣の中に挿込み、其の中を潛つて庭園に忍び入る。暗闇の中に燈火明るく見えるは數寄屋、其の障子には男女の睦じけに囁き合ふ姿が映つてゐる。伴之丞ははつと驚き、氣は上つりながら慕ひ寄る。權三は、蛙の聲がはたと止んだので耳

を敬て、「何者か来た」とて、刀押取り出ようとす。おさるは興奮して、「これ遣らぬ。三方は高塚、北は次垣、犬猫も潛らぬに、人の来る筈がない。獨しての氣遣ひ、さてはお前と私が斯うしてゐるを、妬む女子が喚きに来る、其の覺えがござんすの」。權三「これは迷惑。さやうの覺え微塵もない」。おさる「否ある」。媒人が口を添へればつい埒の明くやうな愛人があるわいの。さうとは知らなんだ」と、嫉妬の焰に燃え、「これ見よがしの其の帯は、定紋の三つ引と裏菊と嫌らしい引並べ。誰が縫うた誰が遣つた。嚙みちぎつて返けう」と飛掛かり、權三の帯を手繰つて庭に棄て、「其の帯に名残惜しうござんすか。不承ながらこの帯なされ」と、己が帯を引解く。權三は餘りの事に腹を立て、「二重廻りの女帯致した事ござりませぬ」と、同じく庭に投棄した。伴之丞は之を拾ひ、「市之進女房・笹野權三姦通の證據を得た。岩木忠太兵衛に知らせる」と、叫んで逃げ去る。

權三は驚いて刀を抜き、庭に飛下りたが既に遅く、暗闇の中にくろつく波介を見附けて斬殺した。かくて刀を逆手に取つて自刃しようとするを、おさるは其の手に縋り付き、「身に疊らないお前が死なつしやる譯がない」。權三「二人が帯を證據に取られ、寢亂れ髪この態、何と言譯が出来ませう。もう侍が廢つた。貴女も人畜の身となつた。え、残念な」と泣く。おさるは驚き、自分の無思慮から己れを誤り、人をも誤つた事に氣付き、「はあッさうぢや、淺ましい身になり果てたか、え、是非もない。もはやこの二人は生きても死んでも廢つた身。東にごさる市之進殿、女房を盗まれたと誇られては面目もあるまい。どうで死ぬならいつそ不義者になつて、市之進殿の面目の立つやうに討たれて死んで下され」。權三「いや不義者にならず、この儘で討たれても市之進殿の面目は立つ。不義でなかつた事が後に知れば我ら二人の面目も立つ」。おさる「残念にごさうが、死んだ後に不義でなかつた事が知れては、市之進は誤つて人を殺したと言はれて恥になる。女房と一言いうて下され。お氣の毒に存するが、三人の子までなした夫には替へられぬ」と、わつと泣き、互に「夫よ」「妻よ」と言ひ合つて涙にくれる。

時は夜明の七つ頭(四時過)、伴之丞から我が姉と權三とが姦通の様子を聞いた甚平は、提燈を持ち人足を連れて駈附ける。おさる「弟の手にかかつて犬死しともない。どこから逃げよう」と見廻して、伴之丞が忍び入つた四斗樽の中を潜つて、共に駈落する。

評

人は美の誘惑に對して、往々我を忘れて身を誤る事がある。藝術肌で情熱のおさると、多才で溫雅の權三とが、共に水の滴るばかりの美貌を見合つては、互に心を動かさざるを得なかつた。彼の女は夫や子供に濃かな愛情を注ぎつつも、美の誘惑を抑へかね、危きに近づいて遂に不義の汚名を受けた。當時の道徳は、姦通を大罪として残酷な制裁を加へた。巢林子は、斯うした因縁に囚はれた罪の子をも深く憐んだのである。現今でもおさるに似た行爲は往々あるが、身の大事に至らずに濟むのは、つくづく時代の相違を思はせられる。

○重帷子 かまなかたばら つまならぬつまを重ねた男女が討たれた時に、男は越後婚の帷子、女は納箱の帷子を著てゐたといふに據る。

○君八千代 我が君は千年も萬年も御繁昌であらせられよ、我が君を祝福した語。「古今集」卷七、賀歌の部に「わが君は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむす迄」。

○御留守 主君江戸詰の御留守。

○濱の宮 出雲國松江の北海岸妻岩神社をさすのであらう。

○やぶさめ 失鹿馬やぶせうまをばせうまの略稱といひ、或は矢伏射馬やぶしめの義ともいふ。馬に乗つて馳せながら、獨矢を番うて的を射る武藝。其装束は水干、縁附笠などで、鹿の毛皮で脚部を包み、射場に入つて扇を披いて之を背後に投げ、弓に矢を番へ聲をあけて馬を馳せ、第一の的を射て矢を番へ、又聲をあけ馬を馳せて、第二の的を射る。又かくして第三の的を射て畢る。

鐘の權三重帷子

君八千代國は、治まる御留守にも、弓馬たしなむ梓弓馬あつさのみかりの、庭乗遠乗と、遙に出し濱の宮、鳥居通りの流鏑馬馬場、竝木に落る風の音と、ろ、ろと打波も、乗分のりわけけつべき器量こそ、表小姓の數々の中にも笹野權三ささののりぞうとて、武藝の譽世の人に、鐘の權三は伊達者のどうでも權三は好い男、謠うたひ離はならす美男草うつくしきおんなぐさ、女若おんなわか二つの戀草を飼かひにかうたる月毛の駒つきげのこま、前脚まへあしとつてかん強く、雪嚙ゆきかみ砕く白泡しろあはに、さんせうよしや尾おしは青柳あおやなぎの、しつたりしたりした、かつしかつしと歩あまする、大

○表小姓 表勤めをする小姓。小姓は貴人の側
に給仕し、煙草盆・お茶・お手水など、総て膝許の用
を辨じらるもので、年配十三四歳又は血氣盛りの男子
である。索引によつて「裏小姓」をも見よ。

○鏡の權三：權三は好い男 「松の落葉」
〔元祿十七年刊〕卷五、鏡權三男踊の歌に「そりやそ
りやそりや」鏡の權三ははすむにござる、谷の
やつとんと笹やで、やああそろそににかる、しなへ
てかゝる、ごふでも權三は濡若た、油盡から出す様
な男、しつとんとろり見とれる男、ごふでも權
三はよつとつこい好い男へ。

○美男草 南五味子とも書き、びなんかづらと
ろろ・とろろかづら・さねかづらともいふ。常緑蔓生
の木本で、葉は厚く平滑で光澤を有し、其の形橢圓
形鋭尖頭である。七八月頃小形淡黄白色の五瓣花を
開く。果實は小球の集合より成りて紅熟し、直径一
寸ばかりある。この文は、美男を美男草にいひか
け、「戀草」の雜語につづけ、それらの草を以て「飼
ひに飼うたる月毛の駒」と、後の文につづけた。

○女若 女色と男色。女色の道を女道といひ、男
色の道を若道といふ。

○戀草 戀種（こひぐさ）である。それを戀草に寄
せ、戀心のもえ立つを草の萌立つさまに譬へていふ。

○月毛 馬の毛色、茶色の少し赤はみたもの。

○かん強く 馬強く性荒くして人に咆喝くやう
なのをいふ。「落葉」に「駈馬の突也、馬のかんの
つよき云は此字なり」。

○きんせう 三焦は漢方にて六腑の一。水分の

鏡の權三重帷子

坪流の鞍の内、稽古に心染手綱搔線り〜乗り拍子、「はい」とかけたる一聲に、
兩口放す奴が髭も、共に跳ねたる駄足や袴の裾に風受けて小波寄する須彌の髪し
つ〜しつと、乗戻し引廻し乗る、袖摺の松も女松の十八公、其年頃の振袖の京
染模様菅笠は、家中で誰の娘ぞや、お乳母らしいが小風呂敷、權三見る眼の絲薄
ちらりほらりと馬の先除ける、振して邪魔をする、權三それぞと見し人の、心に
覺え荒駒も、色にそばへて足早き、はい〜聲をかことにて、馬ぞ迷惑痴話の鞭

排泄をつかさどるといふ。「三焦善し」とは、馬の口角の色善き
をいふ。即ち口中が鮮明光潤桃色を呈し強健なるをいふ。明馬
師問編「馬經大全」春集、帝問「馬師學脈色論」に「口角應三焦
也、凡口中之色鮮明光潤如桃色者平」。

○尾は青柳のしつたりしたり 尾は青柳のやうに垂
「したり〜」を「しつたりしたり」にいひかけた。「馬經大全」春
集、相馬黃金歌に「尾似流星須教細」とあつて、良馬の相で
ある。

○大坪流 大坪慶秀の創めた馬術の流派。慶秀は上總の人、
足利義滿及び義持に仕へ、駁術を善くし、鞍轡を作る妙手であつ
たといふ。

○しゆみの髪 馬の鬣の頭から肩に續く毛の稱。とりがみ。
「太平記」卷十三、龍馬進奏事の條に「頭は雌の如くして、須彌
の髮膝を過ぎ」。

○十八公 松の字を分解したのである。謡曲「高砂」に「松

は萬木にすぐれて十八公のよそほひ。十八公に十八歳をきか
せた。

○京染模様 京都賀茂川の水で鮮かに染出した友禪などの
模様。

○菅笠 當時女子が外出するには、菅笠を被る事が流行した。
「足新翁記」に「婦人の菅笠を被りしは延寶の頃より起りしなる
べし、當時の人が賀の岡より出るものを好みし故に、加賀笠と書
けるもの多かる歟」。

○家中 大小名の家人の總稱。

○眼の絲薄 いろいろ。秋波。
○そばえて ふざけ、はずんで。「枕草紙」に「そばへたる小
舎人童ながらに引取られ泣くもをかし」とありて、「春燈抄」に「そ
ばへはざればこりたる心なり」とある。

○かごと 口實。

○泥障 障泥とも書く。馬の脇腹を覆ひ、泥の跳上るを防ぐもの、毛皮又は革で製す。「貞丈雜記」に「泥障は、もとは雨天に衣服にはねつく泥を降る爲のものなり、後には晴天にも之をさして飾とするなり、武用にはいらぬもの故、軍陣、騎射などに用ひる事はなし」。

○すず 篠である。「ささ」(笹)と通ず。小竹をいふ。

○つけばこそ 餘り早くて、つく事すら見えぬ。

○賣馬 馬を乗りならすこと。「辯遊笑覽卷四」、武事の條に「賣馬馬を乗りならすを賣める」と云ふ。

○ない 中間小者奴などの返答詞で、「はい」といふに同じ。

○中間 侍と小者との中間で、召使はれる者、後に轉じて、しもべの中に頭立つた者をいふ。

○ぬけくと 巧言を以て言ひ抜けする體。上手口を言うて、しらはくれるさま。

○おろく うるむ狀にいふ。「おろく」涙は涙の目にうるむこと。

○まく 紛の義か。邪魔に思ふ者を事に紛らして他所へ離れさす。「色道大鏡」靈龜門に「まくい、やなる者をそれと言はずに其の座を立たせ、又來べき者を來ぬやうにしかけたる體をいふ」。

打ちくれ、く駈けさする、轡の音ははりりん、泥障の音ははたはた、叩く嵐や馬場先のすゞの、笹原さらく、さらくさつと乗飛び、乗飛びく乗飛ばせ、蹄を陸地につけばこそ、二町五反の馬場の内、息をも繼がず半時許達者を飛せてぞ、せめ馬の鞍も鎧も、汗になり乗止むれば小者馬取、「もうお仕舞か」と走り寄る、「ヤイ丁稚、殊の外汗になつた。一走り歸つて著替の袷持て來い、馬取共其間宮へ往て休息せい」、「ない」といふより中間ども休む方には足早く、立去る跡につるくと立寄つて、足の爪先、鎧共にしつかと取、「久しうござんす權三様、御無事で目出たふござんする、これ見ぬ顔もよい加減にしたがよいぞや、可愛そに馬も骨折らせ、今日一時に稽古せねば叶はぬか、さ程私が嫌ならば最前から除けずとも、何故此馬に踏殺させて下さんせぬ、エ、此方様はなふ侍のぬけくと、よふ嘘を吐かしやんす」と、睨む目の中おろくと女は涙脆かりし、これお雪どの、人にこそよれ川側伴之丞殿の妹御、君傾城をなぶる様に權三が嘘をつくものか、少も心かはらねども下々の奴等まかふ爲、中間めらが見附けふかと馬に乗心もせず、氣が宙を飛ぶ様で、是れこの如く汗かいた、地體乳母、お主が不調

○女中 やや敬つていふ婦人の泛稱。

○ふつと ふか不圖に促音「し」の添加した副詞。偶然。

○忝くも 「切實りにする」にかかると。

○梨も礫もせず 音沙汰無きないふ。礫を打つ事も無いの義。梨は無(なし)の假字。

○目代 番人。

○ぐる 「ぐる／＼」などの「ぐる」で輪になる義。

○一味健黨 共謀もあひけん。

○十八豆 さまさきの一種であつて、莢が長いこれにお雪の十八歳をいひかけた。

○せせりさがして つつきまはして。いぢ(弄)りちらして。

○あべかから 「あは威動詞」べかかうは「めあかく(目赤)めかかう」「べかかう」と轉じた語。更に轉じてべかこともいふ。現今では「あかんべい」といふ小兒が下腹(したまぶち)を指で引下け裏の赤いを見せたいふ語。以て不承諾の意を示す所作である。

○文は落散る…あやまり 手紙を差出すなら、其の手紙はごに落散つて、誰に讀まれるやら知れぬ爲に、それを深く遠慮して、返事を致さなかつた段は私の不調法。

○舍兄 家兄「あにき」。

○味な氣質 風靡りな異な氣質で、交はりにくきをいふ。「便宜集賢」に「あぢな・あぢなこ・あぢな心もちなご言ひて、常に異る義なり。もさ味より出でたる詞なるべし」。

鏡の権三重帷子

法、屋敷の人目もあるもの、若い女中に意見もせず、此様な遠駆け、御家中ふつ

と名が立ては、此権三御奉公がならぬ、申交した詞は違へぬ、サア同道してお歸

りやれ早う／＼」と乗出す、響取て引留め、乳母が不調法とは、好い手な事おつ

しやれなやいの、権三様、よもや忘れはなされまい、去年の冬私が宿で、お雪様

とお前と逢はせた時、是限りとおつしやれたか、サア何と、たつた一夜切に切賣

りにする娘御じや御座らぬアウ、忝も、それから梨も礫もせず、お文の往く度

毎に、此方から返事せう、どれ何處に一度の返事もなされたか、お雪様の父御様

母御様は御座らず、目代になる此乳母はぐるなり、伴之丞様へたつた一言いひ入

れで、つい御祝言濟む事、サア奥様に持たしやるか、但否か、否なら否と今御意な

され思案がある、ほんに私が育てて自慢じやないが、男に指もささせぬ、甘ひ盛

りの十八豆、柔かな内を一口食ふて、せりさがして置かふや、そりやなりま

せぬア、あべかこふ」とぞ喚きける、「ヲ、女中の氣では恨尤、文は落散る遠慮

深く、返事せぬは身があやまり、御舍兄伴之丞とは、御膳番の淺香市之進に茶の湯

の相弟子、心易い朋友なれども、申し悪いが味な氣質で、むさと物のいはれぬ仁、

○御自分 おまへ様。貴殿。

○用人 有用人の義より出た名。もこは才藝ありて役に立つ人を指せる稱呼であつたのが、後には家老職の次に位する重職となつた。もこ才達の職なるが故に、世家譜第の筋目早き者も登册されたのであるといふ。

○帯の縫 帯に紋を刺繍する事が當時流行した。

○丸に三つ引 圖の如し。

○裏菊 菊花の裏を象つた紋。

○鞍の前輪 鞍の前後に圓く高き處がある。其の前なるを前輪、後なるを後輪といふ。

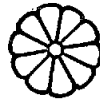
○八幡 八幡の神も照覽あれの意で、自誓の詞。

○畜生の心は人よりも恥かしい 畜生の心は思ひ込み深し、恠れぬものなれば、其の畜生に聞かれることは、人に聞かれるよりも恥かしい。「蘆屋道滿大内鑑」第四に「夫の大事さ大切さ愚痴なる畜生さんがいは、人間よりは百倍ぞや」。

○馬の耳風に嘶く 「馬耳東風」といふ語をいひかけ、何とも感ぜずに嘶くばかりであるこの感にうた。

○栗毛 馬の毛色、體毛雜黒であつて鬣及び尾の黒きもの鬣。

○乗り入れて 乗り馴らして。近松作「十二段」第五に「馬上の達者に乗り入れさせて候へば、足立ち軽く」。



裏菊



丸に三つ引

若い者の口から、御自分の妹下されとは、何ともそれは恥かしし、然るべき媒頼み兩方へ挨拶あれ、我らは合點伴之丞さへ呑込まれるれば、用人衆まで伺ふて、其上は縁次第、此詞を違へなばたつた今此馬から、眞逆様にころりと落、踏殺さるる法もあれ、心底變らぬ〜と、いへばお雪がにつこりと、笑顔に聞く小風呂敷、「これ此帯の縫見て下さんせ、丸に三つ引お前の御紋、わたくしは裏菊、善ふはなけれど私が細工、大小の縮る爲、中入に念は入れたれど、紘け口がお氣に入まい、さりながら、末永ふ、縫ひ仕立てて召させねばならぬ、どれぞ媒頼みて本式の言人はお前から、是はまづそれ迄の心頼み、此帯の如く何時までも、お腰元を離れず添纏ふてやそうじやぞや」と、鞍の前輪に打懸くる其手を取てじつと締め、「どうもいはれぬ嬉しい心、八幡我らも心底かはらぬ、此馬も聞て居る畜生の心は人よりも恥かしい、こりや證據に立て馬よ聞いたか〜」と、いへどもいかな馬の耳風に嘶くばかりなり、權三帶疊んで懷に押入、「あれ〜演手から栗毛馬の遠乗は、舍兄伴之丞、「ハアほんに乳母兄様がそれ其處へ」、「ヤア且那樣かこりやならぬ、見附けられては後の邪魔、サアまづ此方〜」と本社の方へぞ

- 小身者 少歳の者。
- ろく 「まろく」の「ろく」と同じ。満足の意。
- 爰はの時 爰はよいふ大事の時。
- 大身 高歳の者。
- せめて 馬を乗馴して。馬に鞭をくれば鞭飛はしての意。
- 今迄乗つてお見やる通り 我は今迄乗つて、貴殿の見られる通り。
- 汗も入り方の月毛の駒 汗も乾き、入り方の月毛の駒をいひかく。「入り方の月毛の駒」とは、月の入る方の西方に月毛の駒の頭を向ける意。
- 櫻狩 馬の息遣ひを知つて疾走させ鞭の打方で、馬術に於ける秘傳の「一、船田和先(多喜治)撰「鞭之傳」(寫本)に「櫻狩の鞭」しさり馬の下頭を鞭にて敲るゝ有(大相違也)櫻狩とは要名也、息合を知る事也」。近松作「當流小菜判官」小菜鬼鹿毛曲乘の段に「明けの空行く月に鞭を揚ひ、二千里刹那の駿馬の曲、之を名付けて櫻狩、父母の手綱といふこや」。
- 秘密の手綱 秘傳の手綱。
- 左右に輪をかけ違へ 蘇馬の時、合圖と同時に馬が駈出すやうに、互に左右より輪狀に乘廻し運動をつけおくをいひ、これも馬術の法。
- 逸物 多くの中ですぐれたもの。尤も馬などにいふ。
- 口を切る 馬を馳らす時手綱を弛めるをいふ。「切る」は放つ意。
- 角を入る 馬を進めようとする時、鑿の鉸具

鑿の權三重帷子

走りける、程なく伴之丞乗來り、^{權三}お身も遠乗か、いかふ精が出て、馬持が能い故に、其月毛も一兩年めつきりと能^クなつた、買人があらば賣つて仕まひ、五兩も七兩も利を取て、又跡から安馬買置き、乗入て賣つたらば、金持になる筈、よい藝^{ハル}覺えて仕合^セと人をけなす口癖、權三氣だてを能く知つて、「ヲ、サ小身者の馬の手入飼をろくに飼はぬ故、見懸けばかりで爰はの時の用に立たぬ、御身たちは大身人手は多し飼はよし、すはといふ時かん強く、歩み勝はお身の馬、秘藏めされ」といひければ、「ム、其言分は先度二の丸の櫻の馬場で、其月毛に此馬が歩み負けた當言な、サ一馬場せめて勝負せう、サア乗れ」と氣をせいたり、「イヤサ心得たといひたいが今迄乗つてお見やる通、人馬共に草臥只今歸宅、重ねて重ねて小者共來いやい」と、いへどもいつかな聞入す、「イヤ草臥とは負用心、勝負せねば堪忍せぬ」と、手綱を繰つて乗出す權三も今は力なく、馬には一息つがせたり、我身の汗も入方の、月毛の駒に櫻狩秘密の手綱繰控へ、繰緩め左右に輪をかけ違へ、互に負けじと二三遍入かへ、乗たりしが、權三が馬は逸物の口を切^テて角を入、「ハウツ」と懸けたる聲の内一散に駈出す、伴之丞が栗毛馬、鞭影に尻

で馬の脇腹を蹴るをいふ。「角」は鉸具の當字。「貞丈雜記」卷之十三、馬具之部に繩にカクミ云ふ所あり、鑿の頭に細きかねあり。

りて力革へ差通す、其細き金をサスカミもウツオカネとも云ふ、又ヒヂカネとも力金とも云ふ、又カクミ云ふなり。

○屏風返し あふのけざまに倒れること。

○中間（既出）

○一人腹 一人立腹。

○いはれぬ挨拶 いはれない挨拶。いはれるべき譯のない言ひ懸り。

○進物番 諸方からの贈物を取扱ふ役。徳川幕府にも謹儀にもこの役名がある。

○あかがね月代 髪を剃つた禿頭の銅色に光ること。「和漢三才圖會」支體部に「月代」俗云左加夜木、近世武士及庶人元服以後剃髪整髪之稱也。

○東御家老 江戸詰の御家老。

○眞の臺子 正式の茶の湯に用ひる臺子。昔來朝から博多の聖福寺に贈り、それより紫野の大徳寺に傳はつた黒塗の茶櫃をいひ、其の茶道の法式を傳へたもので、其の傳授を得て宗匠となる。臺子は正式の茶の湯に用ひる四本柱の櫃で、風櫃茶碗茶入、水さし等を載せるもの。

○本式の飾物 眞の臺子には最も重要な法式があつて、利休が南坊宗啓に傳へた眞の臺子飾は五十箇條もある。又床には三具足、脇櫃には盆袋等を飾る。

○どなたが傳授なされた 何人が傳授をお受けなされたか。

込して、打ても引てもしやくつても、前脚搔いて高嘶し、躍上り跳上り鞍にた
 まらず仲之丞、屏風返しにどうと落、木の根に腰骨打ち當、「あいたく」といふ
 聲に、馬取・中間・草履取、主人の恥も打忘れ、一度にどつとぞ笑ひける、權三驚き
 飛で下り、「怪我はないか」と立寄れば、「こりや權三相手はお主が月毛馬、此方へ
 渡せ切て捨る、馬を渡せあ痛あ痛、腰を揉め中間共、うぬらも首があぶない」と、
 權三が方を尻目にかけて、相手知れずの一人腹、權三もいはれぬ挨拶と、身を控へ
 て立たる處に、進物番の岩木忠太兵衛、六十八でも生得堅き赤銅月代剃立てて、
 「ヤ御兩人是にか、御宅へも參るべきに能い處で御意得た、東御家老衆より御狀
 到來、此度若殿御祝言相濟お悦び、お國に於て當月下旬近國の御一門方御振舞御
 馳走の爲、眞の臺子の茶の湯なさるべしとの事、是によつて我等が賀淺香市之進
 も留守なれば、御家中弟子衆の中、眞の臺子傳授の方へ、御廣間本式の飾物等勤
 めさせ申せと、御留守御家老衆より仰付らるるとは申せども、どなたが傳授なさ
 れたも存せぬ故お尋ね申す、此度の御用に立てば第一は御奉公、其身の手柄賀の
 市之進も本望、何と御兩人聞覚えもあつて茶の湯の名を取らふなら此度なり」と

○我慢者 自ら高ぶつて人を凌ぐ者。

○秘事は嘘 「誣草」に、「嘘は目の側にあれば見えざる如く、世に秘傳といふ事も、聞ては安き事ながら、習はざれば知り得ずといふ事なり、聽非子曰、知如嘘也、能見百歩之外、而不見其嘘、是聽と語勢相似たり」とある。

○數年の稽古は此度 數年稽古したのは、此度の用に立たう爲である。

○東山殿 足利將軍義政をいふ。義政が茶道に堪能であつた事は人の知る所である。

○嫡傳 的傳とも書く。正統の相傳。直傳。「合類大御用集(享保二年刊)言辭門」に「的傳」又云直傳。

○聞きはつつか 聞きかじつた。

○非の入れぬ 他から非難を受けない。

○疝氣 漢方の病名。男子の大小腸又は腰部などの痛む疝氣。

○龍の駒にもけつまづき 龍馬(駿馬をいふ)の駒といふ語によつた片言。

鏡の権三重帷子

ぞ語りける、我慢者の伴之丞、「ハア、眞の臺子易い事、傳授許しは受けねども、
秘事はまづげ何でもない事、色々我等存じて居る、數年の稽古は此度御用は拙者
承る、心安ふ思召せ」。「それはまづ珍重權三殿は御存知ないか」、「されば存じた
とも申されず存せぬとも申されぬ、惣じて是は茶の湯の極意、家々の傳多けれど
も、師匠市之進一流は、東山殿より嫡傳、一子相傳の大事なれば、權三體が茶の
湯で、傳授許受けう筈も御座らねども、師匠の咄し聞きはつつか儀も有り、大概
非の入れぬ程の御用の間には合はせませう」と、詞の中より伴之丞、「ハアかほど
大事の晴の御用、間に合せて済むものか、此御用は伴之丞が一人して勤むる、忠太
殿其通り心得めされ」といひければ、「いや我一人の儘にもならず、娘ながらも市
之進女房かれが所存もあるべき事、假初ならぬ眞の臺子の傳授事、あやまり有つ
ては殿の恥諸事談合づくがよい筈、サア御兩人御歸りかいざ御同道致さうか」「と
もかくも」と伴之丞殿ちがく腰を引、忠太兵衛頼憎く、「此方は腰をお引なさる
るが疝氣でも起つたか」、「さればく拙者程の馬の名人なれども、龍の駒にもけ
つまづき、馬から落ちて落馬いたしました」と、片言やら重言やら忠太兵衛おかしさ、

○生駒新五左 生駒は馬の縁によつた姓、新五左は武士をいふ俗語。「遊遊笑覽」に「新五左とは武士をいふ。」「櫻雲集賢」に「田舎士をいふ。」

○影もささず 跡形もなく全快する。癖は聞歌熱の一種で、隔日又は毎日時を定めて、始めは寒く後に熱する病をいひ、再發し易い病であるから、俗に癖は三年かひさすといふ。

○澁口 苦口の意にいひ、茶の雑語。

○昨日は今日の初昔 昨日は今日の昔といふ意に初昔をいひかけた。

○初昔 舊曆三月廿一日に初芽を摘んだ茶、即ち一番採りの宇治茶を精製した最上の濃茶の略である。初昔の後に摘んだ茶を後昔といふ。「安齋隨筆」卷二十八、茶に極そそのの條に「初昔、後昔と云ふは、昔の字は廿一日と書くなり、三月廿一日に摘みたるを初昔といひ、廿一日後に摘みたるを後昔と云ふ。」

○人は氏より育ち 人の賢愚また人品の高卑なさは、家柄筋目よりも姓方しつげかたの如何によつて如何やうにもなるとの意の語。「この文は、「初昔」「世の日に合ふ茶」といひ、「氏」に「茶の名所宇治」をいひかけ、茶の雑語によれる文節である。

○きやしや ほつそりとして上品なこと。

○風俣ばしくゆかしく 人を慕はしげらせゆかしがらせる風姿なるをいふ。

○數寄屋 茶會の爲に建設した小庵の稱。「和漢三才圖會」卷八十九、味果類、茶湯の條に「本朝茶儀式、其盛行也始予東山殿、選茶和羹陶器盃盆釜爐等珍貴者、詩茶與吟茶、謂之數寄。」

彼奴なぶつてやらんと思ひ、馬から落て落馬したとはいかふ念の入た落馬、痛むが道理何方も落馬が流行るやら、生駒新五左が瘡も、妙藥一服でかげもさゝず落馬いたす、我等は今朝他所へ参り、大事の精進をつる落馬いたした、此様に落馬の流行る時、むざと言分などなさるゝな、首が落馬いたさうぞ」と、澁口いふも茶の湯者を聲に、持つたる 三重

身の習ひ、昨日は今日の、初昔世の口に合ふ茶の名所、人は氏より育ちかや淺香市之進の留守の宿、おさゝはさすが茶人の妻、物數寄もよく氣も伊達に三人の子の親でも、きやしや骨細の生れ付風俣ばしくゆかしくの、三十七とは見へざりし、數寄屋廻りの掃拭ひ下女、中間にもいろはせず、簞放さぬ奇麗好き路次の飛石敷松葉、石燈籠は苦むして、巖となれる手水鉢植込の、木の下蔭の、落葉掻くなるまで夫婦ながらへて、子供の末を高砂の、松の榮や祈るらん、中息子虎次郎棹竹横たへ、年季の角介杖提げ、路次の中に走り入、景清是を見て、物々しやと夕日影に、打物閃かいて、切てか、れば堪へずして、刃向いたる兵は四方へばつとを逃にけるゑいやつとう、くくとぞ打合ける、ヤイ、餘程にあがけよ其

○いろはせず いぢらせず。手を觸れさせぬ。
○敷松葉 茶室の庭に枯松葉を敷くこと。

○木の下蔭の落葉掻くなるまで：松の榮えや祈るらん 講曲「高砂」に「所は高砂の屋上の松も年ふりて、老の波も寄りくるや、木の下蔭の落葉かくなるまで命ながらへて」とあるに據つた。「高砂の松の榮えは、高砂の松の如く千年も榮える事の意。

○年季の角介 年限を定めて召し使つてゐる奉公人角介。

○景清これを見て、四方へばつとぞ逃げにける 講曲「景清」に出てゐる文である。

○物々しや 物體らしいの意。もと相手を物らしくあり、其の價値を認める義であつたのが轉じて、たいさうらしい、をこがましいの意にいふ。

○打物 太刀、薙刀の類、打ち鍛へて作るよりにふ。

○あがく 足掻。馬などが前足で地を掻きにけるをいふ。轉じて、兒童がいたづらしてはね廻るをいふ。

○ぬく はか。俚言葉體に「ぬく太郎」温暖湯の意也、馬鹿を云。

○奔走 走りまはり世話する義より轉じて、愛しつくしむこと。可愛がること。

○大學 四書の一。政治的倫理説を述べたもので經書に列す。昔は兒童に四書の素讀を教へた。

○音羽山 京都音羽山下で焼いた茶碗。音羽燒。

縫の權三重帷子

處なぬくめ、見ん事男の數に入ながら江戸の供さへえ仕居らず、小さい子を相手にして、怪我でもさするか數寄屋の壁に、疵でもついたら何とする、これ虎次郎、あの馬鹿を相手にして日がな一日悪あがき、一々に帳に付、父様お歸りなされたら、きつと告げる待て居や」と叱られて、いや母様、悪あがきはしませぬ、わしは

侍じや鐘つかひ習ひます」「これなふ、そなたももう十じや、其合點がいかにか、侍は侍知れた事、さりながら父様を見やいの、御前も能く御加増まで下された、

武藝は侍の役珍しからぬ、茶の湯を上手になさるる故、人の用ひ奔走もある、幼い時から茶杓の持様、茶巾さばきも習ふて置きや、ながくの留守の中、子供が悪ふ

育つたといはれては、母が浮名も恥かしい男の子は男の手、祖父様へ往て大學でも讀習や、馬鹿よ供して暮方に連れ戻れ」と、内外までに氣を配る、留守こそ心盡

しなれ、お菊はさすがが姉だけの、母様いかひお世話、ちとお休み」と指出す、薄茶

茶碗の音羽山、大人くれたる振を見て、「ヲ、孝行なよ、よふ言やつた、大人しうなり

やつた、妹のお捨は乳母と遊びに出たさうな、行水もしまふてか此髪は誰が結ふ

「人倫訓蒙圖彙」檢物師の條に、「都に於ても所々にあり、御堂、音羽、御井池、粟田口等にあり。」

○おとなくれたる 大人ぶつたる。

○險 險相の略。するどくすこみある事。

○鏡 龜鏡。模範。てほん。

○人の振見て我が振の 「人の振見て我が振直せ」の語に據る。

○繪に書く筆の：花も見る 筆のなぐさみに描いた京大阪の美婦人の繪を見ては、其の容貌風俗などを知られる。吉野初瀬の櫻も、肉眼で見なくても心を以て見れば、其の美景が心の中に見えて来る。故に人は見え形よりも、更に心を磨く事が大切であるといふ意。

○上臈 身分貴き婦人をいひ、以て美婦人の意。

○冷泉 淨瑠璃節の一種。(見索引)

○江戸 淨瑠璃節の一種。(見索引)

○な見せそ 見せる勿れ。「な…そしは禁止の意をなす助詞。

○容儀 容貌の禮儀にかなふこと。容姿。この文意は、人の顔かたちは生れつきなれば、これは麗しくしようにも、やうにもならぬ意。

○たしなみ 心がけ慎むこと。

○黒髪のみめやすかるべし 「徒然草」第九段に「女は髪のみでたらんこそ、人のめだつべかれ」とある。「めでたし」は、甚だうるはしい意。「めやすかる」は目易くあるにて、見苦しからぬをいふ。

○徒然草 吉野朝時代の入道律師の隨筆書。

○解きはどき 歌へてさらす意に、髪を梳るをいひかけた。

た、萬が細工と見えたの、鬚がま少と下つた額もけんで愛相がない、髻の出し様髪付で善ふも悪ふも見せる物、顔の道具相應に、眉が女子の大事の物、前髪も斯うでない母が直してやりましょ」と、開く櫛箱鏡臺の、此鏡より世の中は人こそ人の鏡なれ、人の振見て我振の、善きも悪しきも身の手本、繪に書筆のすさみに、京や大坂の上臈も、心で見れば今爰に吉野、初瀬の、花も見る、殿御持ての朝寝髪、湯上り、顔や洗ひ髪、人にな見せそ亂れ髪、寐亂れ髪の枕にも、寐顔は猶も、つつまじや、容儀は生れ付なれば只嗜みは黒髪の、めでたからんこそ、女はめやすかるべし、とつれなく草にもあるといひ、とかく女子は髪かたち干筋と撫づる櫛の齒に、身持行儀の解きほどき子を思ふ手につや〜と、見かはす程に見へければ、「それの、格別よい子になりやつた嘘なら其鏡を見や、親の目は眞目、他人が證據萬来いよ、飯焚の杉もちやつと来て、お菊が髪つき見てくれい、「あい〜」と走り出「是は是は、奥様いかひお上手額付髪つきで、下地の好いお顔が猶美しうならしやんして、女子でさへ辛氣が湧く云々」と譽むるもあり、杉がはたと手を打て、「ア、さうじや、日頃の不審が今晴れた、私が鏡で顔を見て

○つや／＼ 艶々。光澤のうるはしいさま。
○辛氣が沸く 氣を揉み懣懣するをいふ。「辛氣燃す」といふ句もある。

○男の生粹 男の中の純粹の男。

○三十七の酉 實説では三十三歳、夫宗味四十八歳、密次文次二十四歳で、何れも戌年生れ、娘くめは十三歳で酉年生れであるが、本曲上演の享保二年の酉に合せて斯くいうた。

○脇詰め 衣服の腋の下、即ちやつくちを身ごろに纏ひつけるをいひ、成人した者の仕立である。

○長門印籠 牛の革に黒漆を塗つた印籠で、も

と秋月長門守屋敷から遣り出した。「江戸屋敷」に

「秋月長門守屋敷より出る、牛皮にて造る印籠なり」

印籠は薬を入れた腰に佩びる小匣で、三重又は五重になつてゐる。この文は、蓋と身とがつくり合ふ長門印籠の如くに、しつくり合つた若夫婦たとの意。

○あひたてなく 分別なく。わけもなく。盲目要なるをいふ。この語蓋し間斷、あひたちし無しの義であらう。「あひたてなく」は「あひたちなく」の轉。

○べべ 衣服をいふ小兒語。蓋し着物はべら／＼とする故、その頭の一音「べ」を離らした語であらう。

鍵の権三重帷子

木地は随分好けれども、人が惚れぬ異な事と思ふたが、髪ゆげの結び様やうばかりで可あつ惜た此身が埋木うめぎじや、慮りよくはい外ながら奥様の手に二三日かかつたら、お國中ちゆうごくの男は、秋風あきかぜに薄うすの穂ほ、靡なびけてやろ」とぞざ、めきける、親ちやうの子を譽ほめるは嫌いやらしけれど、此こ様な娘を大抵たいていの男に添そはせるは妬たましい、常々つとつく／＼思ふには、御家中ごかみちゆうで聲を取らば、表小姓おもてこざうの笹野ささの権三様に添そはせたい、器量きりやうはお國一番武藝ぶげいよふて茶の道も、弟子衆でししゆに續つくはない、そして氣立といふ物が萬人にも憎にくまれぬ、いとらしい氣質かたぎ、男の生粹きつすい々々」といへばお菊は童氣わらべぎの、申母様まか、権三様は大人おとなで、叔父様おぢの様にあらふ、わしやいや／＼」と頭かぶりか掉たる、ア、わけもない、母は三十七の酉、父様は一廻り上の酉で四十九、これ十二違ちがふても見ん事我身達わたちの様やうな子こを持もつた、権三様は一廻り下の酉で二十五、そなたは酉で十三、十二の違ちがひは丁度ちやうどよい似合にあひ頃ころ、まあ二三年して顔も直な脇わきつめたらしつくりの長門印籠ながとみんらう、ほんに四人酉よちの年、是も不思議ふしぎ、榮耀えいよう言はずと殿御とのごに持ちや、其方そなたが否いやなら母が男おとこに持もつぞや、ほんに市之進殿しんしんといふ男おとこを持たねば、人手てに渡す権三様けんさんじやないわひの」と、子を寵愛てあひのあひたてなく、時の座輿ざぐるまの深戲ふかぎも、過去くわの惡世あくせの縁えんならめ、サア此上こゝに衣裳えさう著

○打掛 帶をしめた上に打掛けて着る小袖をいひ、婦人の禮服の一。

○鼻脂手を引き 鼻脂引きに、手を引きをいひかけた。「鼻脂引き」は、小鼻のあたりに分泌する脂を塗るをいひ、以て業「わざ」を手際よくやつてのける時の所作。「太平記」卷第三、笠置軍の條に「胡蘇より金磁頭を一つ拔出し鼻脂引いて、さらば一矢仕り候はん。」

○物まう 物申さうの意。訪問客が「もめまう」といふに對して、取次の者は「ぞれい」と答へる。

○比翼 比翼の鳥の略。雌雄各一翼で二羽合し一體となつて飛ぶといふ想像上の鳥で、その體は和漢三才圖會に載つてゐる。以て男女の縁の濃厚なことに喩ふ。白居易の「長恨歌」に「在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝」。

○まめやか まじめ。

せ替へ、打掛させて見せうぞ」と、娘自慢の鼻脂、手を引奥にぞ入にける、玄關に「物もう」、茶の間の萬が「ぞれい」と應へ出迎へば、笹野權三一樽持たせ、岩木忠太兵衛殿は是に御座らぬか、「ア、毎日お見舞なさるれど今日はまだ見へませぬ」、「ム、然らば奥様へ申してくりやれ、此中は御不沙汰、お留守何事なく珍重に存まする、ちと申したき事御座れども、委細は忠太殿まで申入ませう、此一樽は上方の名酒、稚い方のお慰、お見舞のしるしと、おついでに申てくりやれ」と、いひ置歸れば、「ア、申まづ暫く」と走入、女房はや立聞て、「御口上聞たく、待請た様な事苦しうない、お通りなされと申ませ」と、櫛笥・鏡臺片付けて、塵掃く羽根の二つ羽も比翼の惡縁底深き、笹野權三は遠慮ながら常の居間にぞ通るける、是はよふこそお見舞と申子供方へとお心付、珍しい御持參折々玄關までお出下されても、態とお目にかかる事もなし、して御用とは何事が親忠太兵衛までもなく、直にお咄遊ばせ」と、隔てぬ挨拶まめやかなり、權三手をつき「御親切忝し、忠太兵衛殿か、御舍弟甚平殿を以て申す筈、近頃粗忽の願ひながら、今度御祝言御振舞の御馳走、眞の臺子の飾、市之進弟子中との仰渡し、常々市之進殿

○指圖 茶道具の飾附、位置、式法等を示せる圖。
○印可 印信認可の義。師がその弟子に對して其の修業の進捗を認めて與へる免狀。
○押放して 公然押出して。

○遁れぬ弟子 のつびきならぬ弟子。

○藪から棒 唐突な言行をなす事に喩へていふ諺。

○寐耳に水 意外の事が起つて、びつくりする事に喩へていふ諺。

お物語り一通りは聞覚え、未だ指圖繪圖の巻物、傳授口傳許し印可を受けざれば、
押はなして眞の臺子覺へたと申されず、天下泰平長久の御代、か様の事を勤め
ねば武士の奉公秀がたし、數年の懇望今度の大願、巻物拜見を許されば、生々世
世の御厚恩」と額を疊に押下げて、師弟の禮儀見えければ、扱もく御執心御奇
特なお心入、此傳授は一子相傳にて我子の外へは傳へられず、遁れぬ弟子は親子
の契約あつての上、繪圖巻物も渡す事、それにつき次手がましい近頃粗相な、藪
から棒と申そうか寐耳に水と申さうか、思召も如何なれど、折がなくと兼々心
にこめし故申出して見まする、姉娘のお菊を、此方様へ進せたいと常々私が望み、
今も今とてお噂申せし折柄、かう申せば如何やら臺子の傳授と換々にする様で、
娘の威も落ち大事の傳授の詮もなし、それはそれ、是は是の談合で、菊を其方へ
進ずれば聳は子の相傳、市之進聞れて満足第一私が戀聲、押出して好い女房とい
ふには限のない事、まづ大抵目鼻揃ふた秘藏娘、添はする殿御は此方様除けて外
にない、なんと合點して下さんすかと、いへども恥しげにさしうつむいて返事
せず、「サア如何で御座んすぞ、ハテ何の是が恥しい、扱は娘がお氣に入らぬの、

○當座の色は格別 其の時だけの關係の女は
鬼も角も。

○差料 大小の刀。ここの言議をなして、後に来
の通りなる。

○お供の乗戻せよ 傳授するには離取るから、
お供をお歸しなされよ。

○娘には逢はせませぬ 娘に逢はせ申して
は、臺子の傳授と替へへにする様で、押附けがま
しいから斯くいうた。

○悪性 いたづら。浮氣。

○橋がなければ渡りがない 取持つ者がな
ければ、渡りをつけられぬ。狂言相合橋に「橋が
無うて渡りがない」。

○橋にて祝ふ…紅に染むる 縁の橋渡

しを祝ふ身も、果は伏見京橋の上で斬られて鮮血に
染まる。鶺鴒は鳥の名、「本草」に「綠背白腹尾黒白
股雜」とある。七月七日の夜、鶺鴒をなし天空を攫
めて橋をなし、以て織女星を牽牛星の處に渡すとい
ふ。この故事によつて、鶺鴒の橋を男女契りの橋渡し
の意にいふ。本曲下巻に「身を引かねば期期の身振り、
橋はさながら紅葉の橋に逢瀬の敵と敵」とある。

○つひしか つひぞ。終に。いまた會て。

ム、頭掉らしやんすは否でもない、エ、知れた、とうから外に約束が有そうな、
そうじやく主ある花は是非がない、可惜男に戀がさめた」と立退けば、「ア、是
は迷惑、誰とも我等約束なし、木石ならぬ若い者、當座の色は格別極めし事はゆ
めくなし、師匠の聲と申せば聞えもよし、娘御お菊殿、私妻にきつと申受ませ
う」、「ハアウ忝いお嬉しい、サア望叶ふた、お侍の詞底を押すは如何ながら、媒
なしの縁組、證據の爲、ちよつと御誓言聞ましたい」、「御念入は尤、二度具足を
肩にかけず、市之進殿の差料に刻まれ、骸を往還に曝す法もあれ」と、言はせも
果てず「ア、もうよふ御座んす物體ない、今日は吉日今宵臺子の傳授の書、印可
の巻物渡しましよそれお供の衆戻せよ、まづ娘には逢はせませぬ、私に似たらば
定て悋氣深からふ、側へ心散らさず一筋に頼ます、悪性があつたらば此姑が悋氣
の腰押、お持たせの名酒お前と私が此樽に、かう手をかければ契約の盃した心、
橋がなければ渡りがない、臺子が縁の橋渡しし此樽も橋渡し」橋にて祝ふ鶺鴒の身
も紅に染むるとも、世に謠はるる端ならん、又玄關に老女の聲、「女子衆と頼
ましよ、川側伴之丞妹お雪と申す者の乳母、つひしかお目にかゝらねど、お慮外

○市之進殿歸られては生死のあること
市之進殿が歸られて之を聞かれたら、伴之丞め生かして置けぬとて果合ひになつて、生死のあることにならう。

○袖屏風 袖で顔をおほひ隠すこと。

◇「揉みくさ」「どさくさ」「忍草」「くさ」を
重ねて文を修飾した。

ながら奥様へ密にお咄申たさ、お雪使ひやら何やら押かけて参りし由頼みまする」
と言入る、權三はつと色違へ、扱々思ひも寄らぬ奴奴用有つて参つたぞ、我等に
は大禁物見附られては迷惑、どうぞ抜けて歸りたい」とうろ／＼眼になりければ、
「ハテ伴之丞の侍畜生その妹の乳母、何の氣遣侍畜生の因縁聞て下さんせ、
主有る私に執心かけ度々の狀文、夫ある身を踏付にする不義者、御用人衆まで訟、
恥か、せてと思ひしが侍一人すたるといひ、市之進殿歸られては生死の有ることと、
中使の下女に隙遣つたれば、兄の不義の使に妹の乳母が來たさうな、直に逢ふも
口惜しい、留守を遣ふて奥から様子を立聞せう、女子共挨拶して言ふ事はせて
つゐ往なせ、權三様をもあの婆が、見ぬ様にそつと抜かして往なせませ、夜に入り
人も靜まつて必ずお出、傳授の巻物渡しましよ」といひ捨、奥にかくれ入る、萬
は氣轉才覺もの、目ませ領き權三を圍ふ袖屏風、なふ／＼お乳母殿とやら、此暑
いに老人の御大儀な、どれ汗拭ふて進せう」と、顔にべつたり手拭の縮みと皺と
揉みくさの、どさくさ紛れ忍草權三はぬけて歸りけり、餘り拭ふて顔が痛いか、
折角のお出に、奥様は今朝より親里へ参られ、緩りと逗留有る筈、何なりとも私

○言交はせ 夫婦なるこいふ口約束。

○波風 いさかひ。もめ。

○骨は盗むまい 骨を惜まず、餘産の勢を取られたがよいこの意。

○おはもじ おはづかしの文字詞「もじこじは」。文字詞は、足利時代の末期朝廷式微にして供御の物備はらない爲に、女官等その名を呼ぶを思ひて、何もじこじというた隠語から起つたといふ。

○肝煎 取もち。周旋。

○長鳴が忌事 日暮れ方に鶏の長鳴するは凶をつくることと思ふ。「俗説辨」に「俗説に鶏の宵鳴は凶をつくる也」。

○戌で：往にましよ 戌に犬もあるれば様にあたる」といふ。又俗説に「犬の長階きは不祥の兆」といふ。この二つを取合はせた。

○丁 丁度の略。

○得手に法界悋氣 「得手に帆」といふ諺に、法界悋氣をいひかけた。

○法界悋氣 彼此の差別なく起す悋氣。己に何の關係もなきに起す嫉妬心。おさるの心を表はす。

にお語りなされ」といひければ、「それなら此方頼まじよ、養ひ君のお雪様と申と、

笹の權三様と言交せの事あれども、媒が無ふて御祝言が遅なる、殊に此乳母

が働で一夜の枕をかかさせた、其禮に權三様より雪駄一足銀一兩、是が證據、

侍の妹に侍が疵付ては、退引ならぬ大事、爰の奥様ちよつとお口を添へらると、

波風たたずつる埒の明様に、權三様と内證の跡先しやんとしめてある、御子様方

もあるからは、錢金出して御祈禱さへなさるるじや御座らぬか、人の爲のよい事

は山伏入らずの御祈禱、首尾よふ相濟相應の御禮、そこは乳母が吞込んだ此方も

骨は盗むまい、うはべばかりの取結び、偏へに頼み上げます、始ての長口上

ホ、くくくアウおはもじや」と饒舌りける、これなふ、そつちの心に長ければ

聞耳には猶長い、此方の奥様は禮物取て肝煎する奥様じや御座らぬ、殊に酉のお

年で此方の様な長鳴が忌事じや、早う往んで下され」と愛相なければ手持悪く、

ム、ウ私は戌で丁六十、狼狽歩いて、棒に逢はぬ先に、長吠せずと往にましよ」

と、逃吠してぞ歸りける、奥には得手に、法界悋氣、瞋恚の怒綱されて、静めかね

たる折節、父岩木忠太兵衛、只今是へと若黨先へ告げければ、家内おそれ鎮まり

○あがかせたが萬病圓 「あがく」は既出。運動させた方が健康の爲によい。

○萬病圓 實業名。「雍州府志」藥品部の中にも見えて、販路廣かつた萬病解毒圓をいふ。この文は、萬病の藥といふを萬病圓にいひかけた洒落である。

○わせる おはせる(御座)の約。ござる。来る。

○わる わらは(意)の約訛であらう。人。

○めさ 召されの略。

て、おさゝも可笑しからねども、親に愛相の笑顔ニテ、市之進の留守皆機嫌好ふて満足、虎や捨めが能く遊んで、晝寐をせず睡たい、歸つて早う寐たいといふて、連立つて歸つた、夜が短い、早く寐せて疾く起し晝あがかせたが萬病圓、姊は奥にか、娘の子は十三四から端近く出さぬがよい、姊や捨めはお身に似たが、虎めは市之進に生寫し、こりや、市之進江戸より歸つたといふて、母が側へちやつと往けしと、孫寵愛の戯れ、「ヲ、久しう遊びやつた、祖父様祖母様やかましからふ、奥へ往て姊と竝んで寐しやや、乳母よ寐冷させまいぞ、やい角介、戻つたら何故石燈籠に火はともさぬ、日が暮れたが目に見えぬか、女子ども、祖父様のお慰今の名酒をちと上げませ」ともてなせば、いや／＼名酒より何より數寄屋の庭、毎日見ても見飽かぬ、市之進の物ずき心が伸びておもしろい、ヤ豫て内意咄した笹の權三、眞の臺子の願ひにはわせなんだか、「如何にも懇望なされし故、巻物渡す約束に極めました、「出來た出來た、若い和郎の奇特な、諸藝の心掛頼もしい、仕損じあれば市之進の過失殿の恥辱、祕傳遺さず傳授召さ、さりながら家の大事譯知らぬ下々にも、一言一句聞せまい隱密々々、更けぬ先に歸らふ提灯と

○留守をいひ附きやれ 留守をするやうに下部(しもべ)の者どもにも言ひ附けなされよ。

○物ふりて 舊くなりて。

○隈笹 竹の一種、幹の高さ五六尺に達し、葉は長橢圓形をなし、掌狀に排列す。新葉は緑色なれども、老葉は縁邊白色となる。

○法界 法界無差別の義より、差別なく氣まぐれの意にいふ。字氣さいふと意相似る。近松作「重井筒」上之巻に「やうで湯か茶か呑みにである、法界の男や女も思へは濟む」。この文は、法界情氣を分けて「情氣者ども法界ども」というた。法界情氣とは、己れに何の關係もなきに無差別におこす嫉妬をいふ。

○いひたかい 言ひたくは言への約。

○縁桁 縁板の意。

○絞る茶巾 茶道では茶巾の絞る方にも法がある。前文に茶巾はさきも替うて置きやとある。茶人の妻であるから其の縁によつて斯くいうた。

○お主は怖いもの 主君は怖いもの。其の命であるからこそ夫を手放して辛抱すれ。

ぼせ、皆宵から寝ませ夜敏に留守を言附きやれ、又明日見舞申そう、ヤイ角介、男といふはおのれ一人、門背戸に氣を付い、何をいふても晝でも躰角介だ」と、老の戯言夕暗に、歸れば跡は、門の戸を、さすが數寄者の庭の面、若葉の、木立ものふりて、路次はの暗き燈籠の、火影宿かる隈笹の露は螢か蛙の聲の喧く、萱屋が軒に音づれて、しよろ／＼流れ水の音、夜も深々と更にけり、おさるは縁先に家内は寐入はつしりと、何を思ふと咎め人の無きが我屋の取得にて、涙も袖に落次第、エ、思案する程妬しい、大抵の男を可愛娘に添はせうか、我身が連添ふ心にて吟味に吟味、思ひ込ふだ稀男なればこそ、大事の娘に添はするもの情氣せずにおかふか、晝の婆めが吐し頬、お雪様と權三様と内證しやんとしめてある、エ、腹が立妬しい、情氣者とも法界ともいひたか言へ、傳授も飄箏も何のせう、臺子も茶釜も糸瓜の皮、エ、恨めしい腹立や」と、身を縁桁に打付けて観す、涙の袖零絞る、茶巾の如くなり、「ハアウア、思へば情氣も因果か病か、是程情氣深ふては、我男を手放して海山隔てて能ふ置くぞ、よく／＼お主は怖いもの皆心の氣隨から、姑が聾の情氣とは悪名の種、さらりと思ひ忘れう」と、拂へども猶

○見えぬ障子：入りにつけり 障子を明けて
敷寄屋に入つて、障子をはたき閉じしめた。「見え
ぬ障子一重」の句は、人が疑ふであらうといふ事が
我が身に見えぬ意と、障子を閉めた意とをふくむ。

○三幅對 三幅對の掛物。

○三つ具足 花瓶・燭臺・香爐。西鶴作「世間胸
算用」巻一、間屋の寛調女の條に「あ、三具足みつ
ぞそく」お寺へあけよ。

○壺飾 床脇の櫃に茶壺を飾つて置く茶室の式。

○印可 (既出)

○うそそり うそ／＼(薄々)の轉。ほのかに。
こつそり。こそ／＼。近松作「丹波與作侍夜」のむ
ろばしに「遂に見ぬ金の間をうそ／＼と覗き見廻
れどし」。

○うつそり ほんやり。人に出し抜かれて鼻を
あけるをいふ。

○息ぼね 音(おと)はねともいふ。音聲。

○鏡 棊の蓋ふたをいひ、形が鏡の如く圓いか
らの稱。

○まつかせ よしきた。(見索引)

○葉山繁山：思ひ入る 「新古今集」卷十
一、戀歌一の部に「筑波山葉山しゆ山繁けれど、思
ひ入るには障らざりけり」とある歌を應用して、枳
殼垣繁つて入り難けれど、四斗樽の底も蓋も抜い
て穿込んだれば、茨に障らずに入る事ができる意に
いうた。

鏡の權三重帷子

胸焦す涙は癖となりにつけり、契約なれば笹の權三重供をも具せず靜に門を叩く音、
内にも答へず走出「誰じや」、「笹の」とばかりに明るる戸を、入より早くはたと
閉め、直に敷寄屋へ〜と、手燭片手に傳授の箱、二人忍びし有様は人の疑ひ
あるべしと、我身に見へぬ障子一重、明けて敷寄屋に入りにけり、是は繪圖の巻物、
祝言・元服・出陣の臺子、これ御簾の中の茶の湯の圖、誠の眞の臺子とは、此行幸
の臺子の圖、三幅對・三つ具足・壺飾の品々、印可の卷許しの巻これを讀ば口傳
入らず、心靜に緩々とお讀なされませ、權三戴き繰返し、讀めば世間も靜まりて、
蛙の聲も更渡る、折しも川側伴之丞四斗入の明樽下人に持せ、市之進が屋敷堀の
廻り、うそ／＼耳をそばだて小聲になり、ヤイ波介、内には能ふ寐たぞ、おさゝ
が寢間へ忍び込、口説き了せ積る念を晴し、色の上にてたらしこみ、眞の臺子傳
授の巻物してやり、權三めにうつそりさせう、若し人が起きあふても女小者、口
へ砂でも頬張らせいさばねを揚げさすな、それ鏡突抜け、「まつかせ」と、踏みつ
くれば底も鏡もすつほりと抜けたるを、枳殼垣にぐんぐつと、葉山繁山繁けれど、
茨障らず思ひ入る抜穴道とぞなりてけり、おのれは四方見合せ跡から來い」と伴

○しつぱり濡れの露 男女の情交しめやかな
じ。

○楯はお留守 楯の捲れあがつて居るも、心そ
こに無ければ直しもせぬ恋を、市之遊のお留守にい
ひかけた。

○流れ武者咽を渴かし 川に流された武者
の如くしよけて、上氣して咽を渴かし。

○なごど なかうご(蝶)の約。

之丞、そろり／＼と這溜り、庭に出れば數寄屋の内に燈火の、影は障子に男と女、
忍び逢ふ夜のさゝめ語、頷き合ふて顔と顔寄せてしつぱり濡れの露、寝てしまふ
たかまだ寝ぬか、染々うまい花盛、伴之丞も氣は上づり、楯はお留守を念がけて、
先陣越された宇治川に、膝ぶり／＼の流れ武者咽を渴かし立けるが、權三が聲に
て、「ハア誰ぞ庭へ来たそうな」、「ハテ晝さへ人の來ぬ處夜更て誰が來るものぞ」、
「イ、ヤ今まで鳴いた蛙がひつしやりと鳴止んだ」、「ア、蛙もちと寝まいでは、き
よろ／＼せずとまづ巻物ども讀ましやんせ、あれ又蛙が鳴きます」と、いふ中に
波介樽を潜つて庭の内主従一處に立やすらふ、あれ又ひつしやり鳴止んだ、どう
でも誰ぞあるは定、ちよつと吟味」と刀押取出んとす、「これ違らぬ、三方は高塚
北は茨垣、犬猫も潜らぬに人の來る筈がない、獨しての氣遣扱はお前と私斯う
して居るを妬女子が、喚きに来る其覺が御座んすの」、「是は迷惑さ様の覺微塵も
ない」、「いや有るいや有る、媒が口を添へればつる埒の明様に、内證しやんと締
めて有る、エ、／＼女の身のはかなさは、うはべばかりに眼がくれて、胸の
中を知らなんだ」と、わつとばかりの、腹立涙、これ宵からくらく／＼燃返るを、

○こらへ袋 堪忍袋。

○こじたるい あつさりせず、いやらしい。

○むしやぶりつく むさほりつく(真附)の蛇。烈しく取附く。

○思ひの闇 思ひ亂れて心の闇となつてゐるのこ、伴之丞のゐるのも見えぬ暗闇をいひかく。

○蛇 女の髪念、髪となつた例は國民傳説の中に往々見聞する處である。

○二重廻りの女帯 六尺五寸の女帯。井原西鶴撰「一代女卷四、身替長枕に「風俗もそれ(芝居)を見習ひ、一丈貳尺の帯結ぶも氣のつきる事ぞ、昔は女帯六尺五寸に限りしに、近年長うしての物好見よけになりぬ」とある。こゝは普通の長さの帯である。

○南無三寶 佛法・僧の三寶に加護を祈る義。轉じて、しまつたの意にいふ。(見索引)

○弓矢八幡 弓矢神の八幡に誓ふ義。自誓の詞。

鏡の權三重帷子

姑しやうとが聲こゑの格氣くわんきと、浮名うきながいやさきに、笑顔えがほ作つて、こらへ袋ふくろふつつりと緒おが斷きれた、これ見まよがしの其帯そのおびは定紋ぢやうもんの三ツ引さんつひと裏菊うらぎくと、小じたゝるい引竝ひんならべ、誰たが縫ぬふた、誰たが違ちがつた、嚙斷かみちぎつて退のけふ」と飛とかゝり武者振附むしゃびしやがつけ、「ハテ此帯このおびには様子がある」、「ヲ、様子ようすが無なふては、様子ようすといふが妬ねたましい」互たがひに泣なやら叩たたくやら、帯おびぐるゝと引解ひつほどき疊たたみかけて擲なり打うち、「エ、嫌いやらし手が穢けがれた」と、手繰たぐつて庭にひらりと投げ、拾ひろへといはぬばかりなる思おもひの闇やみを詮方せんかたなき、二人ふたりの影かげはばらばら髪かみ、「如何いかにしても此態このさま、帯解おびいても居ゐられず」と庭に出いんとする處ところを、「ア、ア、帯おびに名殘惜なごみしいか、不承ふじやうながら此帯このおびなされ、一念一念の蛇へびとなつて腰こしに捲附まきつき離はなれぬ」と、引解ひつほどいて投出いだす、權三餘ごんさんよりにむつとして「二重廻ふたへりの女帯おんなおび、致いたした事御座ことごらぬ」と、同じく庭に投出いだす、すかさず拾ひろひ伴とも之丞のぢやう聲こゑを立たて、「市いち之進のぢやう女房にやう、笹さの權三不義ごんさんふぎの密通ひそか數寄屋すきやの床入とどり、二人ふたりが帯おびを證據せうこ、岩木忠太兵衛いわきちゆうたへいゑに知らする」と言捨いひすて抜ひけて出いる聲こゑ、「南無三寶伴なんぶさんぼうとも之丞のぢやう弓矢八幡ゆみや迷まさじ」と、刀引ひん抜き障子げやぶ蹴破けやぶり飛とんで出い、燈籠とうろうの火かの影薄かげく、探たし廻めぐれば、波介なみがうろたへ廻めぐるをしつかと捉とらへ、「伴とも之丞のぢやうは何なにとした」「私わたしを捨すてて出いられた」「エせめておのれを冥途みやうとの供とも」と、肝きんのたば

○しのぶ 「しのぶ」で「死なう」の誤であらう。

○とても ふうしても。ふうせ。(見索引)

○男 市之進をさす。

○一分 面目。(見索引)

○女敵 己が妻と密通した森夫。「傾城反魂香」中之巻に「女敵討は天下のお許し、千人切つても切り徳」である。

ねをぐい〜、ゑぐればぎやつとばかりにて二刀にぞとまりける、直に逆手に取直し、左手の小脇に突込む處を、おさゝぬ縫つて「こりやどうぞ、不義者は伴之丞、身に曇りないお前が何の通りしのおとは」、「ア、愚かな、二人が帯を證據に取られ、寐亂髪ねみだれがみの此態さま、誰に何と言譯せん、もう侍が廢つた此方も人畜の身となつた、エ、〜無念や」と泣ければ、「扱はお前も私も人間はづれの畜生になつたか」、「如何なる佛罰三寶の冥加には盡果てた」、「淺ましい身に成果てたか、はあつ」とばかりにどうと伏消入やうに歎きしが、「エ、是非もない、最早此二人は生ても死んでも廢つた身、東に御座る市之進殿女房を盗まれたと、後指をさ、れては、御奉公はおろか、人に面は合されまい、とても死ぬべき命なり只今二人が間男と、いふ不義者に成り極めて、市之進殿に討れて男の一分、立て進せて下されたら、なふ忝かたじけなからふ」と又伏沈むばかりなり、「いや是不義者にならず此儘で討れても、市之進殿の一分立、死後に我々曇ない名を雪げば、二人も共に一分立、如何にしても間男に成り極るは口惜しい」、「ヲ、いとしや口惜しいは尤なれど、跡に我々名を清めては、市之進は女敵を討あやまり、二度の恥といふもの、

○くづをれ 頰折れである。元気がくじ折れ。
○五臟六腑 五臟は肝・心・脾・肺・腎をいひ、六腑は膽・胃・大腸・小腸・膀胱・三焦をいふ。轉じて、廣く「はらわた」をいふ。

○甚平、門からは出られぬ 甚平が來り、我等は門からは逃伊出られぬ。

○利生 利益衆生。りやく。

○六道四生 六斗四升をきかした。六道は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上をいふ。四生は、六道の衆生に屬する胎生・卵生・濕生・化生をいふ。胎生とは人間や獸類の如く母體の胎内で進宮の發育を遂げて生れる者をいふ。卵生とは魚鳥の如く卵で生れる者をいふ。濕生とは照露の如く濕地で生れる者をいふ。化生とは神などの怨毒として生れ現はれる者をいふ。人は善惡の業因によつて、六道のいづれへか生れかはるといふ。

鏡の權三重帷子

不承ながら今爰で女房じや夫じやと、一言いふて下され思はぬ難に名を流し、命を果すお前もいとしひはいとしひが、三人の子をなした、二十年の馴染には、私や換へぬぞ」とわつとはかり歎くづをれ見えければ、權三も無念の男泣、「五臟六腑を吐出し、鐵の熱湯が、咽を通る苦しみより主のある女房を、我女房といふ苦患百倍千倍無念ながら、斯う成下つた武運の盡き是非がない、權三が女房」、「お前は夫、エ、くくく」と縋り合泣より外の事ぞなき、「サア家内の眼の覺めぬ中夜も短し、早立退かん」と引立つれば、可愛や三人の子供が、母が今此態で、住馴れた屋敷を退くとも知らず、何事か夢に見てすやく寐入る寐顔に、暇乞を」と泣ければ、「エ、未練な市之進に首尾能ふ討るるより、浮世の願ひ何が有」と、引立門をあけんとすれば、門外に提灯人足扉ぐはたく大音上、岩木甚平笹の權三に逢ひに來た、誰も臥さつてけつかるか明よ明よ」と呼ばはつたり、「ハア、悲しや弟の甚平、門からは出られぬ、裏門はなし塀高し」飛んづ押しつうろつく間に、家内は起きる門は叩く前後に眼を付く茨垣、「ヤア惡人めが抜穴我身に神の御利生」と、二人手を組む生死の巷命の境四斗樽に、六道四生ぎつと詰つて

○先、酒樽、逆襟、さかどんぶり 同じ
頭書によつた所謂頭法。

○七つかしら 七つ時の初め。午前四時すぎか
け。

○無明の酒 煩惱に迷うて真理・理法を如實に
知るこゝの出来ぬを、毒酒に酔うて失心すること
に喩ふ。「妙法蓮華經第七卷に「勿飲無明酒」。

○借老同穴 夫婦の愛情深く、死してなほ同じ
穴に葬られること。「経緯」堀風、琴鼓篇に「死生契
酒、與子成説、執子之手、與子偕老」。「経緯」
王風、大車篇に「駸則異室、死則同穴」。

下 卷 (權三・おさるの道行。岩木
忠太兵衛宅。伏見京橋)

登場人物の主な者

笹野 權三 (雲州松江城主の表小) おさる (淺香市之進の妻。美婦。三十七歳)

おさるの母 (忠太兵衛の妻) 淺香市之進 (松江の侍。茶道の師。おさるの夫。四十九歳) 岩木 忠太兵衛 (おさるの父。六十八歳)

虎次郎 (お菊の弟。十歳) お捨 (虎次郎の妹。九歳) 岩木 甚平 (おさるの弟。菊 (おさるの長女。十三歳)

船頭・女兒等多勢

梗概

〔權三・おさるの道行〕 權三・おさるは懐かしい故郷を跡に、出石の山・大江山を眺めつつ涙にくれて行く。村里の女等が唄ふ歌

動かれず、跡へも先へも酒樽と、共に逆襟さかどんぶりころく頃、は曉の、時
は夜明の七つかしら、二つ頭に足四本、胴は一つの酒樽にあ、ゆむ無明の酒の酔、
これぞ冥途に通ひ樽、契りは借老同穴と一つ棺に一つ穴、何處ぞに埋んで桶の輪
かと云はねど、物がいはせたる

を聞いては、我が身に思ひ較べて嘆いた。權三は腰に差せる大小のうち一刀を賣つて路錢に當て、暑さに苦しみ埃にまみれながら播磨瀧を過ぎる。夜もろくに寐られずとほくと道を迎れば、暗がりに鬼繫ける心地して、住吉も住み憂しと世を捨つる身の、墨染の里に隠れて暫し暮した。

淺香市之進は歸國して留守中の出来事を聞き、妻おさるの嫁入道具一切と、娘二人とを舅岩木忠太兵衛の玄關に送り附けた。おさるの母は病床に寝てゐるが、之を聞いて起上り、葛籠に抱附いて悶えながら、「親孝行で子思ひな彼が、どうして悪事をしませう。天魔の見入りか報いか」と、口説き立てて泣く。忠太兵衛「人間外れの女の道具を取入れては、武士の家が穢れる」とて、下部に命じて焼拂はせる。母「せめて一色づつも残して、子供に取らせて下され」。忠太兵衛「これお婆、今これが悲しいとは。お身も我もま一度は大きな悲しみを聞かねばならぬ。其の時二人は何とせう」とて、涙に眼を曇らせる。

市之進は旅装して笠深々と被り、舅の宅に立寄つて暇を告げる。忠太兵衛「ヤア市之進、今朝は畜生めが諸道具、孫娘二人受取り申した。旅出立は暇乞と見える。かほど根性の腐つた女房の親でも舅と思ひ下さるか」。市之進「たとへ女は畜類になつても、舅は舅に極まつた忠太兵衛殿」。忠太兵衛「あ、御心底身に餘り忝い」とて、感涙に咽ぶ。一家の者どもも集つて別れの杯を酌交はす。まことに悲慘の極みである。

折からおさるの弟甚平が一僕を連れて歸り、「親父の言附に従つて川側伴之丞の行方を尋ね廻り、因州境で討取つた」とて、其の首を出す。一同は之を見て、「首途の吉左右目度し」と、悲しみの中にも喜ぶ。この時虎次郎が來り、「父様の件して敵を討ちに行く」といふ。市之進は之を嫌して思ひ止まらせる。斯くて甚平は其の儘市之進の助太刀となつて共に出發する。忠太兵衛夫婦は涙にくれて之を見送る。子供三人は聲を揃へて、「權三めは斬殺し、母様は息災で連れて戻つて下され」と頼む。

權三・おさるは人目を忍んで、墨染の里に三日間足を留めてゐるが、此處も住み愛しと難波の方に思ひ立ち、伏見京橋に出でて客を待つ乗合船に乗る。

市之進は敵の行方を尋ねて御香の宮へ行く。甚平は三柄の里を過ぎて伏見京橋に出る。そして饅飩・蕎麥切・豆腐・奈良茶を賣る茶船などの光景を眺めながら、乗合船の中に屈んでゐる權三・おさるを見附けて、早速市之進に知らせる。船中の兩人はそれと氣取り、船頭を賺して船から岸に上る。船頭は其の落著かぬ様を見て、縁起の悪い事をいふ。

日は既に暮れ、軒端々々に切子燈籠の灯が點つてゐる。涼臺には芝居話かはすんでゐる。女兒等が盆踊の衣裳を著飾り、踊り歌を唄ひつつ練つて行く。おさるは之を見るに附けても、我が子はどうして居るであらうと、物思ひにくれて過ぎる。計らずも橋の北詰で市之進にばつたりと出合ふ。市之進は「女敵覺えたか」と、いふより早く權三の左腕を切落す。權三「武士の役、作法ばかり」と、腰刀を引抜き、受外して斬殺される。「すは人殺した」と町内騒ぎ立てる。やがて甚平はおさるを引つ立てて來る。おさるは市之進を見て、「なう懐しや」と寄る。市之進は、憎い／＼と思ひつつも迫りくる不便の情を抑へて、おさるを斬拂つた。其の切先は手許狂つて、我が右の跟の躰かけすつばと切つたが、それさへも氣附かなかつた。時は七月中旬の月大空にかかり、美しい兩人が血に塗れた屍を照す。何といふ無慙な光景であらう。

評

一忠太兵衛・市之進・甚平・權三・おさる等は、いづれも善人であるにかかはらず、權三とおさるとが美の誘惑に陥つた爲に、大きな悲劇を生むに至つた。忠太兵衛は愛女おさるの嫁入道具を焼拂ふ。權三は「武士の役、作法ばかり」と叫んで、師匠市之進の刃に喰はれる。甚平は姉おさるを見附けて、白刃を掲げた市之進の前に突出す。おさるは「なう懐しや」というて、夫に寄添はうとして斬殺される。市之進は暗涙に咽んで多情の妻を刺した。其の切先は我が跟の躰かけて切つたのも覺えなかつた。これ等は夫々、嚴肅な武士の精神や、妻としての眞情や、物の哀れを知る武夫の至情を敍したものである。巢林子が總ての者に同情の涙を灑ぐ、其の愛の本領が燦として描寫の中に輝いてゐる。

権三おさる道行 下巻

○鐘の権三：見とれる男 「松の落葉」元禄十七年刊(巻五、鐘権三男踊の歌に「そりや〜そりや〜、鐘の権三はすわにござる、谷のやつ〜んミ笹やで、やあおそろゑにかゝる、機しな〜へてかかる、さふでも権三は薄着ぬれものじだ、油壺から出す様な男、しつ〜ん〜ろり〜見とれる男、さふでも権三はよつ〜つ〜い〜好い男へ」。

○油壺から出す様な男 つる〜〜光澤のある美男。

○しんとん 「しつ〜んの機。しめやかに。ぞつ〜ん」。

○二張の弓 二張の弓を引くは二心を抱くのである。以て女が一夫を持てるには他の男に懸想するをいふ。閨男する。

○本弭 月の端の弦を懸ける所を踏さしひひ、弓を引く時に下になる方を本弭といふ。こゝでは之を本夫に喩ふ。

○引かれぬ方 引いてはならぬ方。こゝでは密夫に喩ふ。

○辛氣 心のくさくさとして浮立たぬこと。前文、おさる 権三話喧嘩の所に、おさるの詞に「こね背からくら〜燃返る」とある。

○浅香の水 浅香(安積)も亦く沼の水に、浅香市之進をいひかく。安積沼は岩代國安積郡にある歌枕で、今、日和田町の西にある東勝寺の後の小池であるといふ。ここの文はおさるが浅香市之進を夫に持ちながら、なほ多情にして笹野権三に濡れ初めたるをいふ。「古今集」戀歌四の部に「みちのくの安

鐘の権三は伊達者で御座る、油壺から出す様な男、しんとんとろりと見惚れる男、どうでも権三は好い男、花の枝から翻れる男、しんとんとろりと見とれる男、いとしひ男、戀慕はれし、二張の弓の本弭の放さぬ先に弦断れて、引かれぬ方にひかれ行く一人留守寝の床の内、心も澄みて眼も冴へて、しんき〜の空悒氣、終に我身のあだし草、世のそしり草、浮草に、浅香の水の漏れ初めて笹野の、露と置きまどひ、寝まどひ歩みまどひては、古郷忘れぬ二人が涙、涌きて出石の山はあれど戀の、病は驗なき、但馬の湯桁敷ふれば、我とそもどは五つと七つ十二違ひの月更けて姉ともいはば岩枕、かはす枕が思はくも、影恥かしや野邊の草、そ

積の沼のはなかつみ、かつみる人に戀ひやわたらむ。

○出石の山 但馬國出石郡出石町の東北に有子山がある。ここの文は、涙が涌きて出づを出石にいひかけ、出れが有名な但馬の城崎温泉に近いによつて、「戀の病は驗なき」といひつづけた。

○但馬の湯桁…七つ 「源氏物語」空蝉に「伊達の湯桁もたゞ〜しがるまじう見ゆ」とあつて、「花鳥餘情」に「伊達の

湯桁の数は左八つ右は九つ中は十六とあるを作りかへた。但馬の湯は城崎温泉である。この温泉は腎臓病、神經病、婦人病等に特效がある。

○月更けて 月夜更けてかはす枕にいひつづけ、見附きの老いたるをいひかけた。

○女郎花 「野邊の草」から女郎花をいひ、人妻たるをきかせた。

○大江山 丹波國で北丹精道河守驛の北方にある高嶺をいふ。昔時鬼神(酒吞童子)が栖んでゐたのを源頼光等が退治した事は、諸國「大江山」にも見えてゐる。

○くすみきる ながくしく沈みかちなるをいふ。
○鐵漿振袖 鐵漿をつけた年増女が、娘の如くに振袖を著。

○大工どのより 閨の掛鐵鍛冶が打つシヨカエ 「若みどり」(寶永三年刊巻四)しよかえふしの頃に、「大工殿より鍛冶屋が憎い、閨のかきがね鍛冶がうつセウガエ」。

○掛鐵の關の鎖の解初めて 田舎女の唄ふしよがえ節の歌を聞き、その關の掛鐵の句から、己が鎖した門の戸を明けて、權三を引入れた爲に不義の身となつた事を逃愼するのである。

○二腰 大小の二刀。
○道芝の露の價 道芝に置く露と、路銀とをいひかく。一本の刀を賣つて、其の銀のかけを旅費にあてた。露は粒銀即ち豆銀(小玉銀)をいふ。

○一本芒苜殘す 武士は二本の刀を腰にさすのであるが、其の一本を賣つたが爲に、一本をさせるのみなるに喩ふ。

○眞字をくる 眞字を練る、眞字を贈る、こをいひかく。眞字に間男をきかせて、姦通を諷する爲に眞字を贈る。「眞字を練む」眞字を練る。なごいふは、

なはたは人の女郎花、おれが口から女房とは、身の恥懐いたづらに、染めぬ浮名の

叢萩の亂れ、泣くこそあはれなれ、振上げ見れば源の、鬼神退治の大江山、峰は

青葉に包まれて、谷も峰上も、森森と山の、態さへ愛相なくくすみきりたる、松

の下蔭、藪の小蔭の一在所、あれ〜〜〜 麥搗く隣等隣の姉が、三十ばかり

で鐵漿振袖それでも戀の一節や、大工どのよりノウ、鍛冶屋が憎い、閨の掛鐵鍛

冶が打つシヨカへ、なふ鍛冶が打つ、閨の掛鐵鍛冶が打つシヨカへ、のふ掛

鐵の、關の鎖の解初めて、迷ひ初めしは誰故ぞ、若い殿御を我故に、頼折れ姿二

腰の其一腰は道芝の露の、價と消果てて、一本芒苜殘す、腰の廻りは秋の暮、淋

しや悲しいとをしと、抱き合ひては泣くばかり、國に親と子、東に夫思ひは千筋

百筋の、我は涙の苧柞練る眞字を練るとや、世の噂手で堰きかぬる、川水に、洗

ふ帷子播磨湯、ろくに寝ぬ夜の眼もとぼ〜と埃、まぶれの髪容、鹽焼く浦の海

士にも劣る、山田畠の鳥威しさりと鳥おどし、栗の鶉や澤の田鶴、ひよ〜と、

鳴くは鴨小池に棲むは鴛鴦、鴛鴦の、しかも鰯の夫の留守守、男鰯の憂ささす

まゐ、鳥の上にも歎かれて、いとど涙の種ぞかし、跡に夕立つむら〜雲にさつ

普通する意の隱語である。近松作「堀川波鼓」に「お種様眞字をお簾（し）うみなさるこ、道中（す）ながら家中の沙汰」。

○手で握（に）きかぬる 世の噂は手で握止める事ができぬを、川水にいひつづけた。

○ひよ〜と：鏝（の）の夫の留守守（す） 「松の葉」(元禄十六年刊)卷三、二あがり、ひよりの唄に「ひよひよと鳴くはひよどり、小池にすむは鶯鶯（う）」を「しどり」を「しごりのしかも煙（や）」やもめに、おふやの留守守（す）もり、さらはえいやまな、えいさらえい〜、えい〜、えい〜、しかも月の夜か闇の夜に、えいさらえい〜とあるに據つた。

○男（お）鱈 江戸詰の市之進が一人慕しなるを思ひ違つたのである。

○鏝（の）の笹原：伸はしやる 流行歌に據つたもので、この歌に似たものは「生玉心中」上巻に戀の意地酒ヤト〜、手もこでかか、押へてかか、：拙（し）じぬる男をほつけて、そこら〜をすんずと欲（し）ましやる」とある。「我を追來る追手か」といふて、既に劍持（は）は笹原走るといふ意より、露の笹原云々の歌につづけたのである。

○石突 鏝の地にある方の端を金具で包んだ所。この文は鏝三が鏝造ひの名人なるをいふ。

○人目狭く 人の目に觸れるのが氣づまり。

○何、難波津、名 同じ頭音によつた所謂韻法。「住吉も住み登し」も頭韻法。「節も伏見山も頭韻法」。

○墨染の里 京都市伏見區にある。この地にあ

鐘の權三重帷子

と吹來る、風の音野邊の、薄の戦（ま）ぎまで、我を追來る追手かと、露（つ）の笹原ヤツト
ン〜、連立ち走る踏分け走る、磯の千鳥をばつかけて、石突（い）欄（か）んですんずと伸
ばしやる〜サアゑいさつさ、ゑいさゑいさゑいさゑい（は）つみ（し）は
なかりしに今は羽風も恐ろしく、船は乗合ひ人目せく徒歩路、急げどはかゆかず、
何を知るべに難波津の名は住吉も住み憂しと、世の憂（ち）き節（ふ）も伏見山染めぬ袂も捨
つる身は、心ばかりを墨染の里に、忍びて 送りける
さりとともと、昔は末も頼まれき、老は憂（お）き身の限りぞと古歌の詞も思ひ知る、

岩木忠太兵衛玄關前、淺香市之進方より、小袖箆（へ）箆（ん）・挾箱（は）・葛籠（か）・長持（ち）、其外嫁
入道具一式積重ね、不義人の諸道具、返納（へ）と叫ばはり散して歸りけり、母は持
病（び）の血の道におさるが事の其日より、癩（し）の瘡（か）に胸痛（ち）みいとど枕（まくら）も上らぬに、なん

る墨染寺は有名である。この文は、墨染の衣は著されども、心は世捨人になつて墨染の里に隠れて暮したとの意。
○さりとともと：憂（お）き身の限り 「續古今集 雜中部、道圓法師の歌に、さりとともと昔は末も頼まれき、老を憂（お）き身の限りなりける」。若い時は、今こそ憂（お）き苦勞をすれども、行末は楽しい時（とき）もあらうと頼（た）みにされた。が年寄れは將來に望みなく、憂（お）き苦の身の限りだとの意。

○不義 差遣の意。
○血の道 血行の不順から起るといふ婦人病。
○瘡 胸部又は腹部に膿瘡を起して烈しく痛む病氣で、婦人に多い。瘡の字は積聚の積にずを加へて、積の字を吳音讀にしたもの。
○瘧 腦などで胸の毒が如く苦しむ。

○尋常 見苦しからぬこと。立派。

○たんと 「尾」たりぬまの約。澤山。(見索引)

○小身こみ 身分卑く秩祿薄い武士をいふ。

○見入 ただる。とりつく。魅。

○ごくにもたたぬ 言句にも立たぬ義。役にも立たぬ。「優訓架」ごくたふの條に「ごくにたたずといふは、不レ推言句の義なるべし、言語道斷といふが如し。

○男一處 (ここの文は「藤夫と共に討つて捨てるおさの諸道具を」の意。

じや道具が戻つた、聳とも孫とも縁切れたか情なや」とよろほひ出、のふ聞く事も見る事も悲しい事ばかり」と、葛籠にかつばと抱き附絶入ばかりに見えけるが、「如何なる天魔の障礙ぞや此様な事仕出す、さもししい氣は微塵もなく、眞正者の孝行者子も尋常に育てて、母様聞て下され私は娘もたんと持、嫁入の時の諸道具を一色も散らさず、子供養ける便に、小身の我夫に餘り苦にかけともないと、いふ詞が違ふにこそ、二十年になる道具古びもせず持なす此心で、そもや悪事を何のせう、物の見入か報ひか」と又口説き立泣けるが、「市之進の身になりては口惜しい筈なれど、餘りに是はつれない子供に譲つてくれもせず、見苦しい門に積ませて我子の恥は思はずか、ヤイ中間共下女共よ餘り人の見ぬ中、はやく内へ運んでくれ」と、歎あせれば忠太兵衛、「これくお婆、聞て居ればぐどくと何をごくにもたたぬ事、市之進には過りない男一處に討つて捨る、女の諸道具市之進が留めて何にせう、人間外れの女汚れし道具武士の家が穢るる、中間共片端に叩き割り、火を付けて焼いて仕舞へ」、「畏た」と棒木槌、鋤鎌、鉞ひつさげひつさげ立かかる、母は堪へかね手を擴げ「待てくれ」、なふ祖父様道具惜しう

○大きな悲しみ　おさるが市之邊に斬殺された時の悲しみをさす。

○めさ　召され。

○若黨わかとう　若年の家來をいふ。又若年ならずとも其の家仕へてゐる侍をいふ事もある。(見索引)

○煙に見えぬ佛　反魂香を焼いたので、李夫人の面影がかけうらたさいふが、道具を焼く煙は反魂香の煙でないから、おさるの佛も見えぬとの惑。
○門火を焚き　婚儀は再び生家に戻らぬやうに葬禮の儀式に似、門の右側で火を焚いて嫁の輿を送るも其の一である。「心中背灰申」にも「編なう重ねて戻らぬ爲、祝うて内で門火焚け」。

はなけれど、今生こんじやうでも來世でもおさるが顔はもう見られぬ、手に觸れた道具、せめて一色いっしきは老の形見かたみに残したし、家敷を欠落する時も唐高麗からかうらひに居るとも、さぞ忘れぬは子供が事常々遣りたいくと、思ひし念も不便ふびんなり、一色いっしきづつも残して子供に取らせて下され」と、葛籠つづら引寄せ箆たんすに縋すがりもだへ悲しみ泣ければ、「これお婆おば、今是が悲しいとは、お身も我もま一度は大きな悲しみ聞ねばならぬ、其時二人は何とせう、年寄とよては憂うれき事を聞が役と覺悟かくごして、じつと涙を堪忍かんにんめさ、身も堪忍かんにんく」と一途いっしょに堅かたき國武士こくにぶしの咽のどに涙を詰りける、何と思案しあんして見ても此道具請取きんじゆては、傍輩はろばい中の思はく他國の聞え、若黨わかとう中間共煙高けいこういは憚り、一色いっしきづ、取分わけ焼いて捨すてい」といひつけられ、迷惑めいわくながら主命つみ葛籠つづら・箆たんす、挾箱はさみ引散し打碎たたき、海士うみの燒火やまびと燃上もえある、煙けに見えぬ佛おまに母は猶も身を悶もだえ、「可愛かひやおさるが嫁入よめいの時、まあ爰で門火かどびを焚き、千秋萬歲しゅうくわんざいと祝ひし其道具、門火の跡あとで灰はいとなす母が體諸からだ共に、薪たきぎとなしてくれぬか」と、歎なげくを見ては下女したよめはした、若黨わかとう小者こに至るまで皆々袖そでをぞ絞しぼりける、殘のこつたは長持ながぢ一つ「取分とて燃もせ」と、開ひく二人の孫娘ひな兄弟あに抱合だいかひ泣居なたり、祖父ぢいも祖母はも夢心地ゆめこち「やれくあぶなや命冥めい加かな孫共ひなや、

○器用 器の用ひられて人の用をなすこと。義に立つ才能。賢いこと。

○離別の作法 「優調茶」さるの條に「今妻を去るに、生める子男にあれば父に附け、女にあれば母に附くるは、鎌倉の時、奴婢所生の男女をしか定められしよりの事なるべし」。

○四十二の二つ子 貞原好古編「本朝傳落」に「四十二のふたつ子」世俗男の四十二歳を厄といふ、四十二を略すれば四二なり、これ死(しじ)に通ずといひ、四十二歳にて二歳の子あれば、父子の歳を合はせて四十四、略すれば四四なり、これ死(しじ)に通ずといひ子を棄つる者あり」。

○茶筌茶 男子の結髪の名。頭髪を臨天の所で束ね、鬘もさむりを元結で巻き、先をほほけさせて茶筌(茶をたてる際に茶をかきまはすに用ひる具)の形としたもの。この文は、市之進が茶筌髪を結へるに、言ひ申變もなきをいひかけた。

○靨釜 茶の湯に用ひる釜の一種で、靨形の杖を表面に彫出したもの。「雅遊解狂集」冬に「人の來りけれど、折ふ酒なければ茶をたてて、靨釜(あられがき)茶當酒」。ここは市之進が茶人であったから、「茶筌」たぎる等と同じく其の縁によつた。

もし火を付たらよいものか、堅い父御のいひ付か何故に聲を立なした、器用に生れついたよな、花紅葉の様な子供を、母めはよふも見捨た」と髪搔、撫でて泣ければ、お捨は何の頑是なく「母様に逢ひたい、母様呼ふで」と泣ばかり、姉のお菊は温順しく「父様は母様を斬に行とおつしやる、祖父様祖母様頼みます、代りに私を殺して母様助て下されと、父様に詫言を」と、膝にもたれ伏しければ、「ヲ、

よふ言ふた母はさ程に思ふまい、虎次郎は何故越されぬ、娘を母に付けるは離別の作法、此方に隔の心はない、孫三人を朝夕に見たらば憂さも紛れうもの、此子は父御の四十二の二つ子にて、祖母がお捨と付たが、今は父母兄弟が世の捨者になつたか」と、口説き繰言身も妻れ、枯木の様な祖父の顔涙に分ちなかりけり、

「泣なく」大事な、なんば母めが捨てても祖父や祖母が可愛がる、甚平といふ叔父がある、サア来い」と手を引泣く、奥にぞ入にける、茶筌髪、言ひ甲斐もなき身なれども、武道を磨く靨釜、たぎる心は運次第、浅香市之進歸國を直に門出と、三人の子を片付て氣は廣けれど、まづしばし、お國の内は憚りの、笠深々と舅の門、今迄とは事かはり案内なしも無禮なり、物もうも角立つ、暇乞

○曲もない、愛慕もない。すゆもない。人憎もない。諸曲録の木に「おら曲もなや、よしなき人を待申して候ものかな」。

鏡の権三重帷子

一禮の傳手もがなと玄關見入立つたる處に、舅忠太兵衛瘦骨高く引褰げ、鍋のつるほど反りに反つたる朱鞆ぼつこみ、一文字に駈出る、「ア、申々」と袖引留め笠取て捨ければ、「ヤア市之進今朝は畜生めが諸道具、孫娘二人受取申た、旅出立は暇乞と見へた、お出過分追付吉左右待申」と言捨て駈出る。「いや申、御顔色も常ならず氣遣千萬、巨細承はり届くる迄は慮外ながら放しませぬ」、「なふ市之進、御自分江戸より下著の節、娘さゝめが提首をお目に懸けいで口惜しい、倅甚平は其日より尋に出る、年寄つても忠太兵衛腰膝立たぬ身ではなし、刀の刃に血も付す、高枕でも暮されず、一人物にも狂はれず、相手もがなと存るに、最初不義の證據を取つて我等にも知らせ、國中に沙汰をした事觸は川側伴之丞、彼奴を切て老後の思ひ出お放しやれ」と駈出る。「ア、これ、御心外尤ながら、御老人の腕先、萬一件之丞に討れさつしやれば、此市之進まづ女敵をさし置、舅の敵を討ねば叶はず、取ませ迷惑は拙者一人平に、御了簡、御厚恩に受けます」とさし俯けば、「なふ是市之進、かほど根性の腐つた女房の親でも、忠太兵衛が討るれば舅の敵を討氣よな」、「是は曲もないお尋、たとへ女は畜類になつたりとも、舅は舅に

○ほえる 聲をあけて泣くを罵り氣味にいふ語。この所の善相は、菅原傳授手習鑑「守子屋の段に應用されてゐる。(下巻一一一頁参照)

○節振舞 節日(氣候の變る折などに祝儀など行ふ日、即ち盆正月など)の舞塵。

○たしなむ つつしむ。氣の弱い事を見せまいとして、堪へ忍んで涙を出さぬ意。

極つた忠太兵衛殿、敵があらば討たいでは、そりやお尋ねに及ばぬ事、「市之進ア、御心底身に餘り忝い」と、大地にどうと老體の跪たる感涙に、市之進も「是は」と手を束ね、涙にくれし賀舅武家の道こそ正しけれ、「サアサア婆にも逢ふて暇乞の盃、兄弟の娘ま一度顔も見たからふ、草鞋がけの體態と奥へとは申さぬ、やいゝ市之進のお出皆来いやい」と呼ばはれば、「ヤ申小さい奴等によく申付たるが、なんと吠えはいたさぬかな」、「イヤゝゝ器用者其其處は氣遣ひめさるな」と、玄關に坐しければ、母は二人の、孫娘、左右に具して立出る、中に盃酒肴盆、正月の節振舞、三人の子の誕生日一家寄合ふ祝ひ日の、座敷は座敷にかはらねど、揃はぬものは人の數、五人顔を見合せて物をばいはぬ目禮に、涙たしなむ顔付は、泣叫ぶより哀にて、酌取下女が袂まで翻さぬ酒に絞りけり、母は涙の堪へ精盡果ててわつと泣き可愛や此子供が父御のいひ付覺へてか、目に涙は持ながら、温順しいを見るにつけ、あの業人の畜生の人でなしの腹から、此様な器用なる子を何として産出した、人竝の根性さげてくれたらば、母も子も揃ふたり、忠太兵衛夫婦は子も孫も産揃へた、手柄者といはせぬか、娘の子は母方付と二人ばかり

○散人 世間を用をなさぬ人。浪人。「莊子入問世に而幾死之散人、又惡知散木」とあつて郭註に「不在可用之數曰散木」とある。

○惡世 福しき宿世。「惡世の契は前世の福縁の意。

◇このあたりの文は、人情の琴線に觸れて身をちぎられる思ひがする。

○すくくく すくやかに。元氣よくさつさつと。

○旅籠屋 旅人宿。「旅籠」は旅行の時に食物を粹れて行く籠の義、轉じて旅人宿をいふ。詳しくは「近松語彙」を見よ。

送つて、虎を殘して下さるは、岩木の苗宇を疎み此方とは縁を切心か、曲もない市之進恨に御座る」と聲を上積る、涙を一言に泣盡すこそ道理なれ、「イヤく恨は相違隔つる心聊かなし、此度我等お暇下され、世の散人となりたれども親子傳へ今日まで樂みと致せし茶の道は忘れ難く、虎次郎めを干野休齋弟子分に預申たり、お恨晴られ門出のお盆を」といひければ、「尤さこそ」と打解けて、隔てず交す盃に、いふ事としては「首尾よく追附本望々々」其本望とは子供の母我妻を切ることを、身の悦びになす事は、いかなる運いかなる時いかなる惡世の契ぞと、思へばはつたと胸塞り、鐵石の如くなる市之進が心かきくれて、覺えず涙に咽びけり、女房おさゐが弟岩木甚平宿なし旅の形もやつれ一僕具して立歸る忠太兵衛伸上り、「ヤイく甚平戻つたか、首尾は如何じや市之進も只今門出、何とく」とすくく立「ヤア市之進、留守の中不慮の事出来、お歸りない先不義者共が提首、此方へ見せ申せと親共の心せき、我等は素より彼奴等の欠落の曉より、直にぶつ立食物を腰に引附け、海道筋の旅籠屋・馬次・舟場を穿撃し、山蔭在々迄も近郷殘らず尋しが、いやく足弱を連れ、氣の後れたる迷ひもの、深く隠るる心

○番頭ばんがしら 武家の職名。殿中に勤番宿直して警衛。雜務を掌る者を番衆といひ、番衆の長を番頭といふ。
「丹波與作侍夜のこむろぶし上之巻に「與作殿は段段に變着役番頭千三百迄お取立て」。

○色を損じ 不機嫌な顔色に變り。

○な 威助の助詞。わい。

○弓矢八幡 弓矢神の八幡も照覽おれの悉で、自誓の詞。

も付まいと存じ、伯耆路へかゝつて詮議いたせども出合ず、つくづく存すれば、
相番を頼し迄にて番頭へも断らず、日敷を經るは不調法と存、引返し只今歸りが
け直に断り相濟、ちよつと立ながら兩親に逢はん爲此仕合、御自分も我等も互に
遅いか早いかで、お目にかゝらずは残念たるべし、幸ひの折に參り合ふ本望達せん
吉左右、いざ御同道仕らん」とぞ勇みける、市之進手を打「扱々御苦勞お骨折、
御親子の御懇意心肝に徹し忝し、最早是より御同道には及ず、我等一人參るから
は外を頼む事もなし、甚平殿は御休息頼み入」といひければ、「いやさ謂れぬ遠慮、
心は彌猛に存ても、人數なければ手の廻らぬ事もある、扱こそ留守の内、よも
や何事もあるまじと、落付ても斯様の事の出来、權三も他國に親類知音もあるべ
し、何と構へ置も知らず、三日路四日路とも踏出し、時の變にて助太刀欲しい事
もあるべし、是非ともに御同道」「イヤこれ御心底頼もしけれど、女房の弟に助
太刀させ女敵討ては本望でもあるまいか、「いやさ助太刀と極すとも、只力に
なるまでの事」と聲高になりければ市之進色を損じ、「扱は茶入釜の蓋取より外、
人の首の取様知るまいと思召すな、弓矢八幡身こそ小身なれ、見事ちぎれ具足の

○おりない おおりのないの略。ありませぬ。ござらぬ。

○腹筋な 腹筋を揉よごるわい。可笑きに堪へぬわい。

○金輪際 大地百六十萬由旬(由旬は十六里とも三十里とも、四十里ともいふ)の底、即ち地層の最底に金剛輪がある。その金剛輪の區域を金輪際といふ。以て真底の意にいふ。

○こたへは 主君の家來であるからは、それを討取つてはお應へをせねばならぬ。そのお届はの意。

○身の蜂拂ひかね 身邊に飛蚊を追拂ひかねる義。以て身邊の危難を防ぎかねるに喩ふ。「習書」劉毅傳に「蜂蓋作於懷袖、勇夫爲之驚駭」。

○助太刀して…疵つけな 助太刀の者(甚平)が討取つたのでは、本討手(市之進)の名折れとなる故に、討取ることは本討手に譲れよとの意。

一領も用意して、すはといはば刃鐵を鳴すお歴々にも負ける事はおりないさ」甚平から〜と笑ひ「ア、腹筋な、然らば足元の女敵何故討ぬ」、「ム、ウ足元の女敵とは、ム、ウ川側伴之丞が事な」、「それ程覺へのある女敵何故討ぬ」、市之進はつと驚「尤彼が不義の狀、數通女が手箱にて見附、彼奴も一刀と思へども一時には手に及す、まづ是は後日の沙汰」といはせも敢す、それ〜、鼻の先には置ながら二人の敵は手が届かず、初日の敵後日の敵といふ分ちは知らず、助太刀頼まぬといふ市之進の女敵一人は、岩木甚平が助太刀討たお見やれ」と、腰兵糧の器引ちぎり、押開けば伴之丞が首、洗たててぞ持たりける、市之進「是は」と手を打てば、舅夫婦大きに悦び、金輪際の敵憎しといふは彼奴が事、但御扶持人、こたへは何と訴へた、「いや訴へに及す彼れも身の蜂拂ひかね、お暇申捨駈落いたす處を、因州境にて思ひのまゝに討取ました」、「手柄〜なふ市之進、敵討の門出に是程の吉左右あるべきか、忠太兵衛が指圖甚平を連れられい、尤いふに及ぬ事助太刀して本討手の名に疵つけな」、「畏たお暇」と立出んとせし處に、十ばかりなる旅人の、門柱に影かくれ、奥を覗いてちらめくを、市之進きつと見、

○八色の雲閉づる 胸の寒がるを強めていうた文句。八色の雲は、「日本書紀」卷一にある素戔鳴尊の詠まれた八雲立つ出雲八重垣妻籠に云々の歌の語により、放翁の出雲をさかした。そして「五色の涙が出る」なごいふ「五色の涙」と同じく、誇張詞である。

○月に誰…里の名 伏見舟とは伏見舟の名に負ふが、月下に誰と共に其の夜舟に輝て月を見よとて斯く名付けたものか、其の舟の名に奪せた里の名の伏見の意。

○涼しくの文字かたどりて 涼字の偏を取れば京である。

○京橋 京都市伏見區京橋をいひ、京都市電伏見線京橋の所にある橋。宇治川の支流に南に架し、長さ四十米ある。橋畔は在時大坂に往復する舟着場で、夜舟、晝舟或は都に通ふ高瀬舟、宇治川下る船舟など輻輳し、川邊の家には旅客を泊め、三絃の聲も喧しかった。

○禊川 加茂川をいふ。伏見の南端を流れる宇治川は、加茂川の流れと合流するによつて、「つ流れの禊川」といふ。禊は、身に罪あり穢ある時、祓ふ爲に加茂川原に出でて、身を流々儀式で、六月、十一月との晦日に行ふ。

○盛染の秋の櫻 伏見區深草の里、盛染にある櫻をいふ。藤原基經が死去の時、上野岑雄之を哀悼して「深草の野邊の櫻し心あらは、今年ばかりは盛染に咲け」と詠じたれば、一株の櫻が盛染の色の花を開いたといひ、地名を盛染と呼ぶに至つたといふ。「蒲州府志」五、寺院門(紀伊郡)の條に、盛染寺

「やら心得ず」と走出れば、中息子の虎次郎凛々しげなる旅装束、おのれ此態は何處へ行く心入、小癩者め」と小腕取て引出す、「イヤ父様の供して行く、姉様お捨は女子なり、私は男敵討親を一人やるは武士でない」と、先に立て走出るを引留め、扱は己を産んだ母を斬る心か、「母様何の斬るものぞ、母様を連れて往た權三めを斬てくれる、どうでも往く」と意地張つたり、「やい悪い合點、叔父様も父も出て行ば、祖父様祖母様お年寄姉や捨は女郎の子、其方を跡に残すは若し權三めが来た時、斬らせうと思ふ用心、随分休齋に茶の湯を習ひ、時々これへお見舞申、お二人へ孝行兄弟どもに氣をつけ、權三めが来たならば斬て捨て、但一人残るが怖くば、連れて行かん」と宥めたらせば、「如何にも一人残りましよ、跡の事氣遣ひせず、必ず手柄遊ばせ」と聞分のよき利發者、舅夫婦は目もくれて「女子男打揃ひ、すぐつた様な子供の成人、見たい心もなき母めはいかなる畜生ぞや、不便とも思はぬ、斬なりとも突なりともやがて本望々々」と、涙ながらの暇乞、兄弟三人聲々に、「權三めは斬殺し、母様は息災で連れて戻て下されさらば、く父様」といへども父はさらばとも、言はんとすれば目もくれて胸に、八色の雲と

日蓮宗也、相傳墨染櫻古在斯所云々。時は秋で、墨染の秋の枯木櫻の如く、我等兩人も其の如き運命にあるものか、この意を寓した。

○船漕ぐ 坐睡のさまをいふ。以て乗合船を漕ぐにいひかく。

○茶舟 「和漢船用集巻五に、「茶船」攝州川用荷物運送の舟拾石積なり、又尾形茶舟あり、其名も茶を煮て賣りし積なる由、遊山舟の名にもすべし、その製海舟作りにして淺川を行く瀬越舟ともすべし、上舟とは製各別なり、或は江戸茶舟と云ふも、名は同じうして製造異也。

○奈良茶 奈良茶粥の時、茶飯に大豆小豆、又は粟などを振掛けたものをいふも、奈良の東大寺、興福寺などで炊きはじめたによつて、この稱があるといふ。

○宇治の川水落添ひて 「茶を賣る」から、其の縁語宇治の川水にいひつづけた。宇治川の水が落添ふにつけても（京橋の架かれる川は宇治川の支流である）、宇治の里は茶の名所であり、宇治の川水は茶に用ひて良い。自分は其の茶に縁ある茶人の妻であつた往時を追憶して、涙にくれるのである。

○御香の宮 伏見の東方に當り、奈良電鐵、桃山御殿前停車場の北。神功皇后・仲哀天皇及び應神天皇を祀り、江戸時代でも崇敬厚かつた宮である。

○三栖の里 伏見の西南方に當り、三洲天皇宮のあたりをいふ。

○そんじやうそこ 尊丈足下、「そんじやうそこ」である。足利時代に往々京都の僧侶間に用ひら

づる古郷、離れて 三五

別れ行、月に誰、寢て見よとてや伏見とは、船に寄せたる里の名の、橋の夕暮

来て見れば、涼しくの文字象りて、京を持たる京橋に、一つ流れの鞍川末吹風

も、袂涼しき、權三おさゐは三日とも、同じ所に足とめて、居るに居られぬ梓弓

伏見に暫し墨染の秋の櫻か入相も、明日をば知らず一日の命、々と聞捨てて、難

波の方に思ひ立、人目を忍ぶ乗合に、空居睡の船漕げば、傍に茶舟を漕連れて

饅飴蕎麥切、きりりくと押廻し、豆腐奈良茶と茶を賣るも、宇治の川水落添い

て昔を胸に涙ぐむ女、心ぞ哀れなる、市之進は御香の宮甚平は三栖の里、毎日そ

んじやう其處々々と、相圖をしめて甚平一人、京橋の夕日影、船どもを見廻し、

「すんど早ふ出る船があらば乗りたい」と、乗人に目を付見廻せば、「早いのが好なら

此船、初夜が鳴と出します」と、「おふいかふ狹そうな」、「狹い事は御座らぬ、若い

旦那殿とおか様と苦の蔭に屈んでじや、あの側が廣ひ彼處に置ませう」、「イヤ居

處は如何なりとして居よふが、初夜といふてはもう遅い、明日の晝船にいたそう」、

れた詞で、老輩より若僧に宛てた善簡なごに塵よ見る所で、先方をさしていふ敬語である。轉じて、其處、其邊の意にいふ。詳し

くは、近松語彙を見よ。
○初夜 初更ともいひ、戌の刻即ち今の午後八時頃。

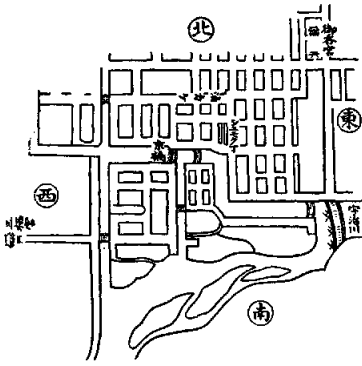
○心祝ひの神の鬮 吉であるやうに心に祝ひ、神を念じて占「うらなひをかけること。そして鬮の一番を「市之進」にいひかけた。

○ハツア大事…もらを 權三の詞。

○人に頼まれ…上げてたもれ おさるの詞。

○たもれ 「たまはれの略。下さい。

○撞木町 伏見、京橋の東北にある町名。



(寫圖繪古) 部一の見伏

○藤森 伏見の北方に當り、昔は深草と稱した里の中。京阪電鐵の沿線に當り、藤森神社がある。

○一分立たぬ 面目が立たぬ。義理が缺ける。

「そんなら勝手、船はこつちの、乗る身はそつちの、強いはせぬ」と云ふ中に船中とつくと見廻し、顔は見へねど十が十是に極つたと、嬉しさ足も飛上れど、

苦の蔭より見附くるかと、態と緩々橋の上、涼む顔して二三遍心祝ひの神の鬮、

市之進が旅宿へと足を飛ばせて走ける、苦押除けて「ハツア大事の物忘れたコレ

船頭殿、此方二人は上げてもらを」人に頼まれ大事の買物銀まで受取、乗急

ぎするのととんと忘れた上げてたもれ、」してそれは何處まで買いに往かしやる」

「ヲ、彼は、何とやらいふ町じや、ヲ、それ、撞木町の彼方、藤の森の先

じや、」ハア此方も餘程の事いふたがよい、爰から何程有と思はしやる一里半御

座る、其中に船は出てしまふ、上げる事はなりませぬ」と情も、なげに取合す、

「イヤ遅くは構はずとも出してたもれ、二人分の運賃は拂ふて上る、平に頼む」

と北南の見世先、橋の上に目を放さず、爰な旦那殿はうろくと詰らぬ事いふ人

じや、乗せませぬ運賃取ては一分立たぬ、矢張乗て御座れ、」それは酷ひ船頭殿、

今の様に跡から乗人もあれば狹ふなる、平に上て下され頼みます」と詫ければ、

「狭い事氣遣ひして下されな、明日の朝大坂迄、満足に届けりやよい、今宵一夜

○のたれる 寄りかかる意であるが、またのたうち倒れるの意にも聞える。

○雁木 船着場に設けてある階段。

○床 船乗客の休み場として床を張つたもの。

○甚平：覺悟あれ 権三の詞。

○私や此方が心ざし 私ば、貴方(あなた)が森夫の罪を負ひ、斬られて死なうと覺悟される、其の志に對し誠に氣の毒に存じます。

○三栖が端 伏見の京橋の南なる中書島(京都市營電車停留場がある)の對岸。

○油掛 伏見にある町名。撞木町の入口にあつて、東西に通じ、上・中・下に分つ。

○切子燈籠 組子の角を切つた燈籠であるから稱、わくを切り、四角な物の角々を同じく角立たせて切つて燈籠にしたもの。これに細く切つた紙なごを貼り垂して飾とする。盞籠筵會などに用ひる。

籠の権三重帷子

はおか様も胴切にして、旦那殿も細々に刻んで片附けて乗せまする、其處らは構はず踏反つて、のたれて御座れ」といふことも、心にかゝる一つなり、おさゝる萬氣にかゝり、ナフ船頭殿、物には情といふ事あり、人を乗せず運賃取れば船頭の一分たゝぬとや、我々とても人に銀をこつばかり、其買物を渡さねばどぶも一分立難ひ、これ手を合する、是非とも上て下され」と、詞を盡せば聞分て、そんなら早う上つた、「ア、過分々々」と二人手を引氣もせく足元、「此方衆は怪我しそうな、雁木に躓き、おか様の大疵に又、疵のつかぬ様に用心々々」と、つね船頭の戯語も、今日こそ胸にこたへけれ、床の蔭に身をひそめ、甚平が爰にあるからば、市之進も此邊に居らるるは必定、サア、二人の望かなふた覺悟あれ」といひければ、ア、それは覺悟の前、國を出る其夜より夫に進せた命、惜しいとは思はねども、若し弟の甚平が手にかからば口惜しい犬死、甚平と見るならば隨分と遁るが、市之進殿への奉公、私や此方が心ざし斯うしても居られまひ、今夜は何處に泊らふぞ、ハテ三栖が端が油かけか、そろゝ京へなりとも上らふ」と、夕べの空もはや暮れて、軒端々々に點す火は切子燈籠、いろゝの、花の繪

○判じ物 燈籠に文又は繪の判じ物が書いてある事をいふ。

○羽織の腰巻 羽織の裾を折あけて、腰に巻つけること。

○野郎帽子 元祿・享保頃は法令によつて、髷は前髪を剃去らねばならぬので、其の夜越敷を隠す爲に冠つた紫縮緬の帽子。この帽子が民間に流行した。詳しくは「近松語彙」を見よ。

○難波江の…爰で切れさ 百人一首名達しの節口説「をどりぐさ」歌である。この歌は流行音頭半九郎節に據つた拔萃であつて、其の全文は、「音曲色葉籠」百人一首節歌、半九郎口傳ぐさの題下にも收めてある。

○難波江の…一夜さへ (小倉)百人一首、泉嘉門院別當の歌「難波江の蘆のかり發の一夜ゆゑ、みをつくしてや戀ひ渡るべき」とあるに據つた。
○山邊 止(や)じめに、山邊(山邊赤人)をいひかく。
○一期猿丸 一期去るまいに、猿丸(猿丸太夫)をいひかく。

○菅家 菅家(菅原道長)に、勸氣(勸氣の意)をいひかく。

○人丸 人に、人麿(柿本)麿をいひかく。
○大江の千里 違ふに、大江千里(後六々連の一人)をいひかく。

○深やぶ 深兼父に、深敷をいひかく。清原兼父は後六々連の一人。

○たんだふれ 只振れで、踊の離詞

盡し判じ物、見世に涼みの芝居咄や踊子の、十二三から八つ九つの娘、優しや、
黒ひ羽織の腰巻に、野郎帽子の濃紫、揃ふ拍子や容振もよく、それ、それ、
それやつとせ、ハエイ、難波江の、蘆の假寝の一夜さへ長き契りと結びはす
れど、許さぬ戀の關の戸や、いつぞ山邊と思へども、一期猿丸との誓詞のあれば、
天智天皇罰おそろしく、親の菅家もそこはかたなく餘所の人丸頼まれずして、直
に大江の千里を越へて、凄き深兼父中押分けて、たんだふれな爰で切れさ
踊る姿の、懐しや、ナウあの踊子を見るにつけ、國の子供もあの年配、生たか死
んだか煩ふか、可愛や今年は踊るまひ、離れくになりはて、何處で死んでも
淺ましい、子供の水も受まひ湯灌葬禮誰がせうぞ、逆なら今死んで、此燈籠を
六道の中有の明りに迷ひを晴れ、せめて未來が助かりたい」と、歩きの口説
言、男も心かき曇り空は今年の日照にも、袖には誰が雨乞の身を知る雨ぞ果しな
き、市之進が嗜む備前國光、運こそ來れ我妻に、此世の縁は薄柿の帷子高く捻裏
げ、甚平とは跡先に引別れたる夕べの雲、時は冥途の酉の下刻、運こそ北の橋詰
にて行合ふたり、笹野權三淺香市之進が女敵、覺えたか」といふより早く打かく

である。

○子供の水も受けまい おさるが、我が子から末期の水も受けなくて死ぬことであらうと嘆くのである。

○逆なら どうせなら。

○六道 地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上をいふ。一切の衆生は六道に迷へるものである。

○中有 中陰有の略。現世から逝去して未來世に生を受ける七日(即ち四十九日)間をいふ。「中有の期」とは、人死して來世に生れかばる道を照す明りの意。

○身を知る雨 思ひある身を知りて折からに降る雨の義。涙をいふ。「古今集」戀歌四の部の歌に、「かす／＼に思ひ思はず聞ひ難み、身を知る雨は降りぞまされる」。「新撰権補」女重寶記(元祿十五年刊五之卷)に「身を知る雨」なみたをいふ也。

○備前國光 備前國光作の刀。國光は備前の刀匠で、建武以前の人たともいひ、文永頃の人たともいふ。

○薄柿 柿蓋で薄く染めた染色。これに薄の薄いをいひか。

○冥途の酉の下刻 冥途の鳥即ち時鳥「ぼとぎす」の略に、酉の下刻(今の七時すぎ)をいひか。

○十番斬の五月闇 曾我新成は時勢と共に、建久四年五月二十八日の開夜、富士橋野の工藤祐經の假屋に亂入し、祐經を斬殺して亡父の讐を報じ、なほ手向ふ者と戦つて十番斬をした。

る、「ヲ、待受たり」と指上る、左手の小腕もたまらず切落せば、飛退去つて

「武士の役、作法ばかり」と一尺八寸抜合せて刃向ふたり、スハ暴れ者斬たは斬

たは、喧嘩よ棒よ、踊子共に怪我さすな、「お吉様ア」、「おせん様ア」、「半兵衛

ヨ」、「權介ヨ」、人を呼やら逃るやら、隣丁八丁九丁町、十番斬の五月闇、夜討の

入たる如くなり、女は甚平をちらりと見て望は夫の切先弟に討れ犬死と暫し身を

引橋の陰、權三が踏込み打切先欄干に切込んで、銜へとめたる刀を捨、エ、竹が

な一本、一手遺ふて鏡の權三と名を取しるし、諸人の形見に遺さんもの、足取な

りとも見物せよ」と、刃を潜る無刀の働さすがなりける手負振、一生一世と念

りに切込んだる右の肩先、胸板を筋かいに、はらりすんど斬られても、猶身を引

ぬ最期の身振、橋はさながら紅葉の稀に逢ふ瀬の敵と敵踏込み、く五刀、切ら

れて仰反に反せども、武士の死骸の見事さや逃疵更に無かりけり、市之進女を見

○くはへ止めたる 欄干の木がくはへ止めた意。木にくひ入つて抜けぬ。

○足取 敵とわたり合ふ足のはこび。

○紅葉の稀に逢ふ瀬 血染めを紅葉に喩へ「稀に逢ふ瀬」といひつづけて、紅葉の嫌の故事に據つた。「太平廣記」に、唐の禪宗の時、于祐が宮城の溝の下流に遊んで、紅葉に詩を書け

るを拾ふ。其の詩に流水何甚急、深宮幾日閑、感動謝紅葉、好去到人間とある。そこで于祐は他の紅葉に、曾聞葉上題、紅戀、葉上題、詩寄阿誰と題して、これを溝の水の上に流す。宮女韓夫人之を拾ふ。後に夫婦となつた時、韓夫人詩を作つて、「聯佳句隨流水、十載幽思滿素懷、今日卻成雙鳳友、方知紅葉是良媒」というた事が見えてゐる。

○韓猫 猫はもて韓國からくじより渡來したも
のなるによつていふ。

○のたをうつ もがいて、うねりころがる。こ
の詞蓋し沼田を打つてあらう。沼田に陥り泥澤を
打つてもかく體より轉じて、臨終の期に體軀を動か
して苦しむをいふ。顛轉反側する。

○龍田の川 大和國生駒郡龍田町の西を流れて
大和川に注ぐ。この川は古來紅葉の川水に流れる名
所である。

◇おさるの此の言動誠にあはれを極めて、讀者の涙
をさそふ。

○あなうら 足の裏。

○歌 權權三男跡の歌(既出)をさす。この文は、
この節歌も既に昔の古い歌なれども、恐るこの女敵
討は享保二年七月に起つた最近の事件である。その
爲に世間を傳つて、題と昔の權三の名を借用し、
その昔歌を引用して昔話のやうに云うたのである。

○谷の笹原 權權三男跡の歌(既出)の中の一節、
「谷のやつとんと笹やで」とあるに據る。

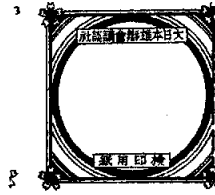
失^{うしな}ひ、南無三寶^{ぼう}と北へ走^{はしり}南へ戻^{もど}り、何處^{どこ}へ失^うせたと小角^{こまづ}を韓猫^{かんねこ}の、鼠^{ねずみ}を探^{さが}す
眼^{まなこ}の光^{ひかり}、橋^{はし}には死骸^{しがい}のたをうつ、折^{おり}しも七月中旬^{しちげちちゆう}血^ちは流^{なが}れてとうくと、月^{つき}こそ
浮^うべ伏見^{ふし}川^{がわ}龍田^{りゅうでん}の川^{がわ}とぞまがふたる、甚^た平^{へい}姉^{あね}を引^ひ立^た來^きれば、エ、助^{すけ}太^た刀^たの其^{その}方^{かた}に
討^うたるは口^{くち}惜^{おし}しい、夫^{おつと}の手^てにかけくれまいか、「ヤ市^{やち}之^の進^{しん}程^{てい}の仁^{にん}、誰^{たれ}が助^{すけ}太^た刀^たを
討^うものぞ」と橋^{はし}の中^{なか}へつき出^でせば、「なふ懷^{なつか}しや」と寄^よ處^{ところ}を片^{かた}手^てなぐりに腰^{こし}の番^{つが}ひ、
くはらりずんと斬^き下^{くだ}げられあつとばかりに臥^ふたりける、帶^{おび}引^ひ摺^ずんで頬^ほ引^ひ上^あげ、見^みれ
ば子^こ供^ごの不^ふ便^{べん}さと憎^{にく}くし憎^{にく}しの恨^{うらみ}の涙^{なみだ}、胸^{むね}に浮^うむを打^う拂^はひ、すんど斬^き下^{くだ}げ取^とり引^ひ
伏^ふせ、肝^{きも}先^{さき}踏^ふへぐつと刺^さいたる我^{われ}が切^き先^{さき}、右^{みぎ}の跟^{かかと}を蹠^{はら}かけすつはと切^きれども覺^{おぼ}
へばこそ、直^すに男^{おとこ}が胸^{むね}板^{いた}踏^ふへ留^{とど}めは何^いれも一^{ひと}刀^{かたな}、鍔^{つら}の權^{けん}三^{さん}が古^{ふる}身^みの鍔^{つら}、疵^{きず}も古^{ふる}疵^{きず}
咄^{はなし}も古^{ふる}し、歌^{うた}も昔^{むかし}の古^{ふる}歌^{うた}なれど谷^やの、笹^{ささ}原^{はら}一^{ひと}夜^よさ咄^{はなし}其^{その}鍔^{つら}の柄^えも永^{なが}き世^よの御^{おん}評^{ひやう}、判^{はん}
とぞなりにける

有共者行發者著は權作著書本

昭和十年五月十日印刷
昭和十年五月十八日發行

釋義と真叢書
傑作淨瑠璃身

製複許不



著者 樋口慶千代

東京市豊島區駒込五丁目九百七十五番地

發行者 野間清治

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

印刷者 井上源之丞

東京市本所區飯橋二丁目二十七番地ノ二

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

大日本雄辯會講談社

(振替東京三九三〇番)
電話(34) 代表 五六二〇〇番
牛込(34) 六二〇〇番

(本製地海天)